

2024

地域連携プログラム活動報告書



Local Partnership Program(LPP)

地域が抱える課題を住民とともに発見し、
その解決方法を考える

和歌山大学観光学部

はしがき

和歌山大学観光学部における「地域連携プログラム(LPP)」は、前身となる「地域インターンシッププログラム(LIP)」の取り組みをリニューアルする形で 2022 年度より再スタートし、3 年が経過しました。LIP の時代を含めると、2008 年度に開始されて以降、これまでに 203 件のプログラムが実施され、延べ 2200 人以上の学生が地域での様々な活動を通じた実践的な学びの機会を得ています。今年度は、連携教育型 15 件、学生主導型 2 件の計 17 件のプログラムを実施することができました。学生の受け入れやプログラムの実施にご尽力いただいている地方自治体や関係諸団体の皆様のご支援とご協力に、心から感謝を申し上げる次第です。

さて本学部は、「観光経営」「地域再生」「観光文化」の 3 つの基本領域を軸として、これらの領域を融合的かつ横断的に学ぶカリキュラムに取り組んでいます。高度な専門性と現場での創造的実践力を獲得することを目標に、国際性を養う教育と国内外の地域の諸課題に向き合う実践型教育を重視する本学部のカリキュラムにおいて、地域の現場で起きている事柄を身をもって学ぶことができる LPP は、LIP の時代より観光学部の実践型教育の一翼を担う取り組みとして重要な位置を占めてきました。

冒頭に触れた LPP へのリニューアルは、学生の実践型教育プログラムとしての基本に立ち返り、地域の皆さまにも学生を育てていただく中で、学生たちが主体性を発揮し、地域との連携・協働による活動を発展させることを意図しております。活動の中心となるのは知識や経験も未熟な学部の1・2年生であり、関係の皆さまには様々なご負担をおかけする場面もあるかと思います。また、活動の結果として、現地調査や商品開発、イベント開催などの成果も多く得られておりますが、一方で想定通りに活動が進まないケースも見られるかと思います。学生たちにとっては、そのような経験も含めて貴重な学びであり、自分たちの考え方や動き方、コミュニケーションの取り方など、活動のどこに問題があり、改善のために何をすべきかを地域の方々とともに試行錯誤するプロセスが、LPP においてはより重要です。そうした着実なプロセスの先に、学生のみならず地域の皆さまにとっても、新たな気づきや、小さくとも意味のある成果が得られるならば、LPP は地域の皆様にとっても価値ある取り組みになるものと考えております。

LPP の取り組みを、大学と地域の双方にとって実りあるものとするため、今後ともご支援ご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

2025 年 3 月

和歌山大学観光学部
地域連携委員会 永瀬節治

目次

1. LPP の概要とこれまでの歩み	5
1) LPP の概要	5
2) データでみる LPP の歩み	6
2. 2024 年度 LPP 活動報告	10
和歌山県紀の川市	
紀の川市の新商品開発プロジェクト	12
和歌山県海南市	
大崎地区の歴史と現状を体験的に調べ、暮らしを継続的なものとするための ステップを議論する	14
和歌山県海草郡紀美野町	
地区×学生による観光・文化・交流情報発信と棚田の再生	16
和歌山県有田市	
多世代で取り組むまちづくり	18
和歌山県有田市	
青みかん(摘果みかん)の価値を上げる	20
和歌山県有田郡湯浅町	
湯浅の若者と共につくる本気の商品開発！	22
和歌山県有田郡広川町	
和歌山県広川町の地場農産物を活用した新商品の開発	24
和歌山県日高郡美浜町	
美浜町の資源を活かした観光誘客	26
和歌山県東牟婁郡那智勝浦町	
中山間地域における地域ハブ(HUB)の役割と可能性を考える	29
和歌山県新宮市	
新宮市を訪れる観光客のニーズ調査・分析及びコンテンツ発掘・発信	32
和歌山県新宮市、田辺市、東牟婁郡那智勝浦町	
世界遺産登録 20 周年プレイベント 世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」を学び、熊野を盛り上げよう。	34
大阪府阪南市	
阪南市の産業振興と魅力発信	36
大阪府岸和田市	
古民家活用を通して地域課題の解決策を考え、実践する。	38
和歌山県有田郡有田川町	
学生との協働による棚田保全・集落支援活動	40
和歌山県西牟婁郡白浜町	
白良浜他海水浴場における集客力アップ及び顧客ニーズにあったサービスの 企画開発	42

和歌山県和歌山市	
雑賀崎の地域資源の情報発信と空き家の利活用	44
和歌山県田辺市龍神村	
地域塾による龍神村の資源を活かした山村活性化	46
3. 2024 年度 LPP 参加学生交流会の実施	48
4. 2024 年度合同活動報告会の実施	50
地域連携プログラム(LPP)の沿革	63

1. LPP の概要とこれまでの歩み

1) LPP の概要

和歌山大学観光学部では、学部創設の 2008 年度より、和歌山県内及び大阪南部の市町村などの協力のもと、地域が抱える課題を地域住民とともに発見し、その解決方法を考える「地域インターンシッププログラム」(LIP)を実施してきた。同プログラムは、地域活性化に関心をもつ学生が、現地に足を運び、地域住民と連携することによって地域の課題や調査活動に取り組むもので、「学生と地域を活性化したい」、「地域の魅力を発見したい」といった地域からの提案を受け、毎年複数の活動を実施してきた。

LIP に参加する学生は、学内の事前学習や現地視察を通して地域の実情を学び、さらには現地調査や地域住民との交流、イベントの企画運営などを通じて、それぞれの地域の真の魅力や課題と向き合っていく。具体的なプログラムとしては、観光施設の職員や利用者への聞き取り、宿泊施設や農家民泊のモニター、集客イベントの企画運営、観光資源調査やマップ作成、就業体験などに取り組んできた。「この地域にはどのような観光資源があるか」、「埋れている観光資源はないか」、「観光資源が有効に活用されているか」、「どうすれば地域が元気になるか」。こうした課題に対して、地域住民は生活者の視点から、学生は「ヨソ者」の視点から意見を出し合い、ともに活動をしていく。このような対話や活動が、双方にとって新たな気づきの機会となることもこのプログラムの特徴である。

LIP は、こうした相互作用を通じて、地域住民は「ヨソ者」の力を活かしながらより自立的なまちづくり活動を行う力を、そして学生は地域住民の思いを理解しつつ、地域活性化の方法を提案できる力を養い、地域を支える人材として活躍することを目指し、2021 年度までに計 166 件のプログラムを実施し、延べ 1,800 名以上の学生が参加した¹。

2022 年度からは、LIP の取り組みの中で見えてきた成果と課題を踏まえ、プログラムの持続可能な運用と質的向上を両立させるため、「地域連携プログラム(Local Partnership Program, LPP)」へと名称を変更し、新たなスタートを切った。

LPP では、観光学部教員と受入地域が連携して活動計画を作成し、学生を募集して活動を実践する「連携教育 LPP(L ゼミ)」と、学生が主体となり、地域と連携しながら活動を実践する「学生主導 LPP(L 活)」の 2 種類がある。L ゼミには、和歌山県内及び大阪南部の市町村など、地域から活動内容を公募する「地域公募タイプ」と、観光学部教員が地域での研究活動等の一部をプログラム化する「教員申請タイプ」の 2 つの実施形態がある。本プログラムでは、観光学部の教育カリキュラムの一環として、地域住民と連携した現場での学びを通し、地域の観光振興および地域再生の実践を学ぶことのできる内容を含むことを実施の条件としている²。

¹ 2021 年度までの LIP の取り組みについては、観光学部ホームページを参照。
(<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/internship/lip/index.html>)

² L ゼミは、単位として認定されている。単位取得のためには事前事後学習を含めて 30 時間以上の活動が求められ、活動時間に応じて、「基礎自主演習」または「プロジェクト自主演習」の単位が認定される。

2) データでみる LPP の歩み

観光学部の LPP は、その前身である LIP を含めて、2008 年度の開始から 16 年間にわたって実施してきた。ここでは、これまでの LIP および LPP の歩みについて、データをもとに示してしていく。

図 1 は、2008 年度以降の年度別実施プログラム数を示している。LIP がスタートした 2008 年度は 6 件であったが、2016 年度には最多の 21 件となり、その後一旦は減少したものの 2021 年度に再び最多の 21 件となった。

LPP スタート(2022 年度)以降は、10 件代後半で推移している。

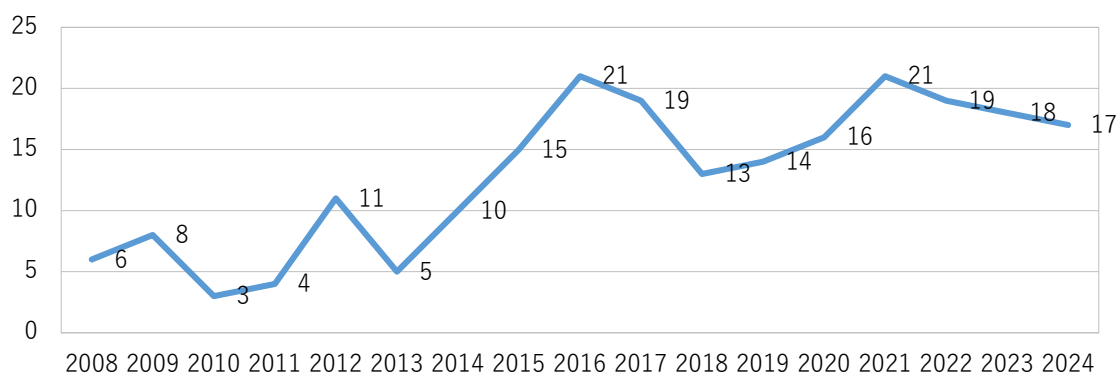


図 1 年度別プログラム数(全体)

図 2 は、年度別かつ区分別での実施プログラム数を示している。LIP がスタートした 2008 年度は現在の L ゼミ地域公募タイプ(地公)のみであったが、2011 年度からは観光学部専任教員からの申請により実施される教員申請タイプ(教申)が設置され、2022 年度の LPP スタートと同時に学生主導型のプログラムである L 活が設置された。

LPP スタート(2022 年度)以降は 3 区分とも安定的なプログラム数で推移している。

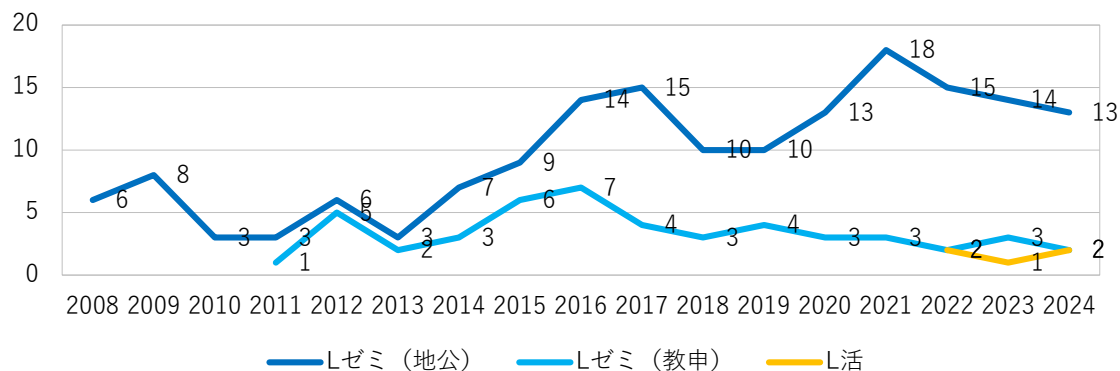


図 2 年度別プログラム数(区分別)

次に、図 3 は年度別の参加学生数を示している。参加学生の延べ人数は LIP がスタートした 2008 年度に 42 名であったが、2016 年には 227 名となり、初年度の 5 倍超となった。

LPP スタート(2022 年度)以降は減少傾向にあるが、「プログラムの持続可能な運用と質的向上を両立」という LPP の趣旨、新たに設置された L 活への移行などが主な要因として考えられる。

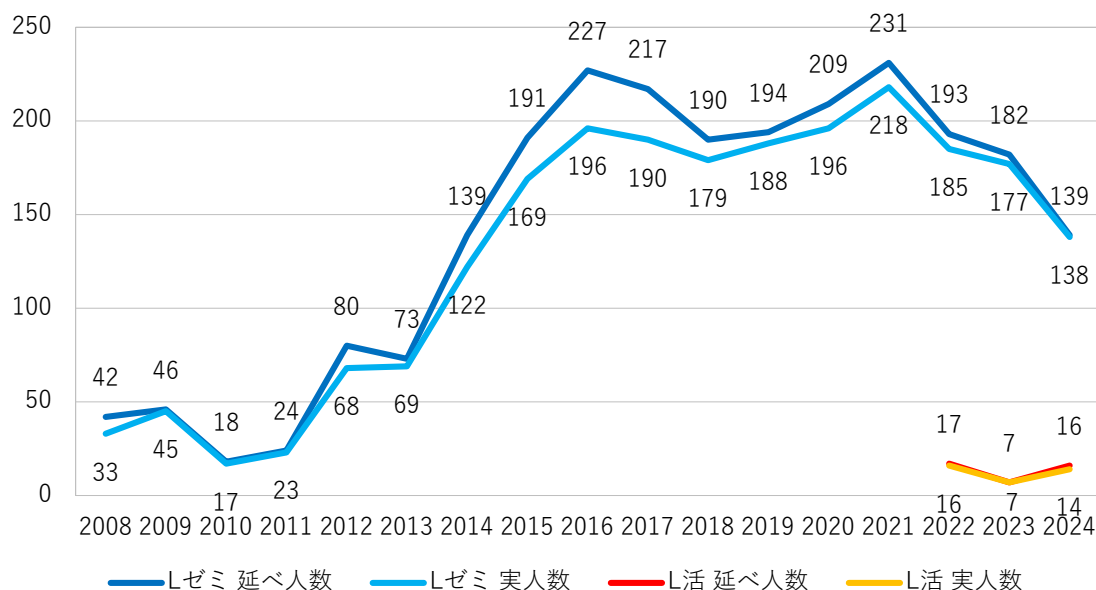


図3 年度別参加学生数

図 4 の通り、L ゼミでは 1 年生および 2 年生の参加が多い。低学年から地域での活動に関心を持ち、積極的に地域と関わりたいと考える学生が多いことを示している。

一方、L 活(図5)では、スタートした 2022 年度から 2024 年度までの 3 か年では 2 年生が最も多く 15 名、1 年生と 3 年生がそれに続く 9 名だった。低学年から地域での活動に関心があることに加え、「L ゼミの期間を最長 2 年とする」制度変更によって、L ゼミから L 活への移行したプログラムの影響とも考えられる。

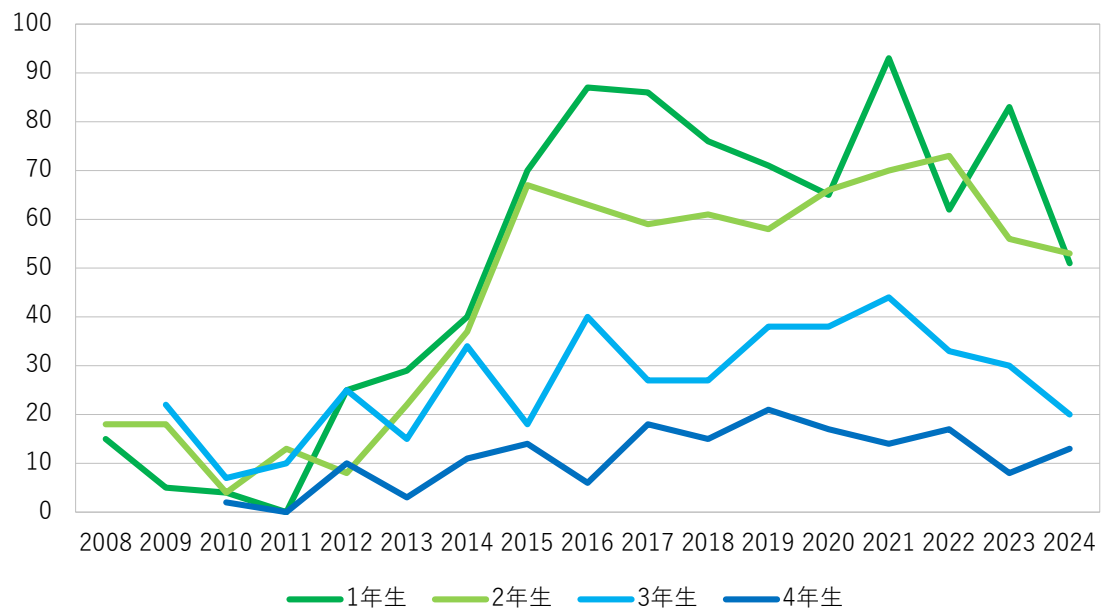


図4 学年別 L ゼミ参加学生数の推移(実人数ベース)

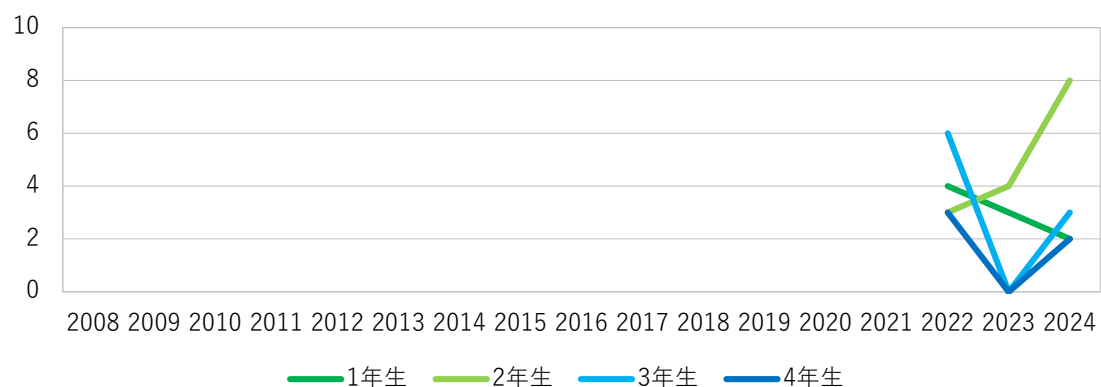


図5 学年別 L 活参加学生数の推移(実人数ベース)

図6に示すのは、プログラムあたりの平均参加学生数である。LIPがスタートした2008年度は7.0名だったが、2013年度に激増し14.6名となり、LIPの終了までおおむね同じ程度で推移した。

2022年のLPPのスタート以降は微減傾向にあるが、「質的向上」というLPPの趣旨に基づいた少人数でのプログラムの割合が増加してきていることが要因と考えられる。

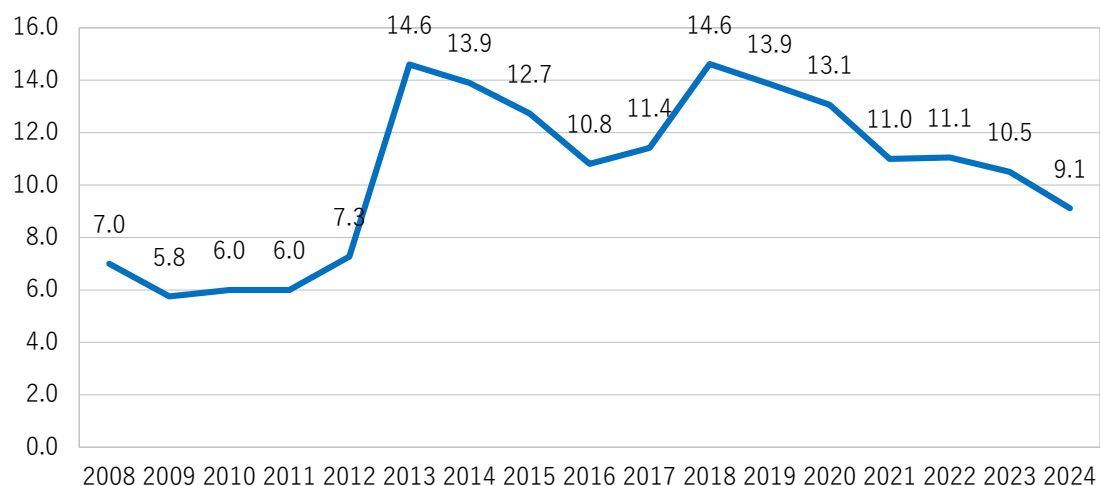


図 6 プログラムあたりの平均参加学生数(延べ人数ベース)

以上のように、LIP としての期間も含めて開始から 16 年となる本プログラムでは、L ゼミ教員申請タイプやL 活の設置などの対応により、参加学生および地域からのニーズに対応した活動が展開されてきていると考えられる。しかしながら、今後も継続的に本プログラムを実施するにあたっては、それぞれの取り組みの質の向上と学生自身が学びをより深めることができるプログラムを提供することが求められている。

(文責:観光学部 地域連携委員会)

2. 2024 年度 LPP 活動報告

2024 年度は、17 プログラムが実施され、延べ 155 名の学生が地域で活動を行った。
以下に示すのが今年度の実施プログラムの一覧である。

■ Lゼミ(連携教育 LPP)地域公募タイプ

No	地域名	テーマ	参加 学生数
1	紀の川市	紀の川市の新商品開発プロジェクト	6 人
2	海南市大崎	大崎地区の歴史と現状を体験的に調べ、暮らしを継続的なものとするためのステップを議論する	7 人
3	紀美野町小川	地区×学生による観光・文化・交流情報発信と棚田の再生	12 人
4	有田市箕島	多世代で取り組むまちづくり	5 人
5	有田市宮原	青みかん(摘果みかん)の価値を上げる	15 人
6	湯浅町	湯浅の若者と共につくる本気の商品開発！	7 人
7	広川町	和歌山県広川町の地場農産物を活用した新商品の開発	5 人
8	美浜町	美浜町の資源を活かした観光誘客	23 人
9	那智勝浦町 色川	中山間地域における地域ハブ(HUB)の役割と可能性を考える	4 人
10	新宮市	新宮市を訪れる観光客のニーズ調査・分析及びコンテンツ 発掘・発信	9 人
11	新宮市 田辺市本宮 那智勝浦町	世界遺産登録 20 周年プレイベント 世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」を学び、 熊野を盛り上げよう。	5 人
12	阪南市	阪南市の産業振興と魅力発信	8 人
13	岸和田市	古民家活用を通して地域課題の解決策を考え、実践する。	8 人

■ Lゼミ(連携教育 LPP)教員申請タイプ

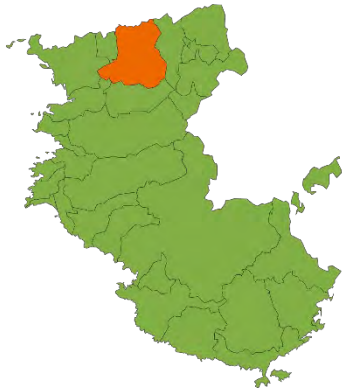
No	地域名	テーマ	参加 学生数
1	有田川町沼	学生との協働による棚田保全・集落支援活動	6人
2	白浜町	白良浜他海水浴場における集客力アップ及び 顧客ニーズにあったサービスの企画開発	18人

■ L活(学生主導 LPP)

No	地域名	テーマ	参加 学生数
1	和歌山市	雑賀崎の観光スポットの情報発信と空き家の利活用	7人
2	田辺市龍神	地域塾による龍神村の資源を活かした山村活性化	6人

和歌山県紀の川市

紀の川市の新商品開発プロジェクト



【活動の基本情報】

参加学生数: 6 名

(1 年生: 6 名)

活動期間: 2023 年 5 月～2025 年 1 月

担当教員: 竹田明弘

1. 活動実施の経緯

LPP(紀の川市)では、これまでフルーツを用いた数多くのスイーツ商品を提携企業、店舗と開発、販売してきた。本年度は、スイーツの商品開発だけでなく紀の川市の店舗と共同した商品開発企画として実施された。

2. 活動の内容

本活動は、参加希望した観光学部学生、紀の川市役所、協力店舗の3者の協力のもとで実施した活動である。本年は、Café sweets Sablier、観光特産センターこかわの 2 店舗と共同活動を実施した。なお、Café sweets Sablierとは 2025 年 2 月に同店舗で実施されるアフタヌーンティーで提供されるプチスイーツ、観光特産センターこかわとは 6 月販売予定の発酵食品を利用したドレッシングの共同開発活動を実施した。Café sweets Sablierについては提供するプチスイーツについてはすでに完成しており、2025 年 2 月に商品提供される予定である。観光特産センターこかわとの活動については、商品完成を 2025 年 5 月末としたいという同店舗の希望により 2025 年 3 月までに商品完成、同年 3 月以降で商品ラベルデザイン、6 月発売の予定というスケジュールになっている。現在の進捗状況として共同開発するドレッシングの原案までは終了しており、試作段階にある。

3. 活動を通じて

本年は 2 つの店舗との活動であるということもあり、6 名の学生について 3 名×2 グループという体制で活動を実施した。ミーティングについては、それぞれがスイーツ、ドレッシングに関する市場情報の発表、アンケート調査と分析という作業を行い、もう一方のグループがそれについてコメントするという様式で進行した。それぞれのグループが最初のプレゼンと比較して、最終のプレゼンはかなりよいものとなっており、学生自身も大きく成長したと考える。とはいえ 1 年次生であり、まだまだ学ぶことも多いと思う。残りの学生生活について多くの学びをし、自らの目標達成に向けて努力と成長を続けて欲しい。

4. 成果ポスター



紀の川市LPP

メンバー

T2410010 上原 ひかり
T2410115 横井 彩乃
T2410116 吉田 安加里

T2410012 宇埜 光莉
T2410089 船越 宙
T2410113 山辻 彩加



紀の川市について

平成17年に紀の川流域の那賀郡打田町、粉河町、那賀町、桃山町、貴志川町の5町が合併して誕生した和歌山県北部に位置する市です。農業産出額全体では和歌山県内1位を誇り、トップブランド「あら川の桃」をはじめ、はっさく、いちじく、柿、キウイフルーツ、いちごなど四季折々の果物が収穫することができます。

紀伊国分寺跡の史跡、粉河寺などの文化財や、江戸時代に世界で初めて全身麻酔による乳がん摘出手術を成功させた華岡青洲など、伝統のある歴史や文化を持っている街です。



活動内容

アフタヌーンティー プチケーキ考案



ケーキ班の活動内容は粉河地区のカフェサブリエ（cafe sweets Sablier）とコラボして、2月11日発売のアフタヌーンティーに乗せる、イチゴを使用したプチケーキの提案でした。予約枠がすぐ埋まるほどの人気店のため、「売れる商品」よりも「満足度の高い商品」を目指し、リピーターの方が一人でも増えることも目標に取り組みました。SNSなどで流行の調査をし、お店の雰囲気に合うデザインを考案を行いました。パレエコア・花・バレンタインの3つのコンセプトを提案し、最終的にバレンタインコンセプトでエクレアやジャムサンドクッキーなど多くのスイーツを採用していただくことができました。

発酵ドレッシング開発



発酵ドレッシング班は、観光特産センターこかわと紀の川市の協力のもと紀の川の特産である果物を使用した発酵ドレッシングを開発しています。

実際に紀の川市を訪れ、既存の発酵ドレッシングの試食と発酵についての短い講話をしていただきました。

これをもとに発酵ドレッシングの原案を考え、紀の川市の特産であるはっさくを使用した甘酸っぱいまろやかなドレッシングを開発予定です。

この商品を通して、紀の川市のはっさくを全国に発信していくとともに、地域発展にも貢献していきたいと考えています。商品は今年5月の販売を目指しています。

まとめ

この活動を通して、紀の川市や特産のフルーツについての理解が深まりました。また自分たちの思い付きではなく、流行やデータに基づくことで説得力のある提案ができるということも学ぶことができました。今年度で活動は終了しますが、紀の川市の魅力やここで得た知識を今後学生生活に活かしていきたいです。

2024.4-2025.2



和歌山県海南市

大崎地区の歴史と現状を体験的に調べ、 暮らしを継続的なものとするためのステップを議論する



【活動の基本情報】

参加学生数:7 名

(1 年生:2 名、2 年生:5 名)

活動期間:2023 年 5 月～2025 年 1 月

担当教員:遠藤理一、八島雄士

1. 活動実施の経緯

大崎地区の地域の魅力の発見と活性化を目指す有志のグループ「げんき大崎」によれば、大崎地区の魅力は海と山が接近した自然環境と港町として栄えた歴史・地理にあるという。また、特徴的なつぼ型の大崎湾と泳いで渡るとも可能な無人島(弁天島)は、地区の暮らしを持続的なものとする資源の1つとも考えられている。これらの魅力を発信すべく、新鮮な野菜や鮮魚等の朝市、食事等を提供できる施設「げんき大崎館かざまち」に加え、2022 年には「一棟貸し宿 百船人」がオープンした。

こうした状況を踏まえたうえで、地区住民と学生が議論し、若者・よそ者視点の発想から新たなアイデアを出してほしいという想いから活動がスタートした。

2. 活動の内容

①大崎でのイベントへの参加:1)大崎での季節ごとの祭りに参加し大崎の名物を用いた料理を製作し出店した。その際に地域の方々との交流を図った。2)地域側の協力団体であるげんき大崎で開催されている魚屋の手伝いに行った学生もいた。3)大崎の施設に宿泊し地域の方との料理やカヤックなどを楽しんだ。

②学園祭での出店:学園祭に出店しげんき大崎で製作された商品と学生によるたこ焼きを販売し、大崎を PR した。

③大崎ガイドブックの作成:学生間の打ち合わせや大崎とのやりとりを通じ大崎地区の概要、観光スポット、地域についての回想、季節ごとの生業や祭祀、食などの移り変わりを表現したフェノロジーカレンダー、また LPP での活動などをまとめた、大崎ガイドブックを作成し出版した。

3. 活動を通じて

学生にとっては活動を通じ、大崎の方にお世話になりながら、地域の方とのつながりを感じる機会となっていたと思われる。また学園祭での出店やガイドブックの作成など根気がいる作業を続ける中で、協働の難しさや達成感を感じたと思われる。一部の学生にとっては、主体的に活躍し、さらに実力や自信をつけていく機会ともなっていた。

4. 成果ポスター

海南市大崎LPP

大崎地区の歴史と現状を体感的に調べ、暮らしを持続的なものとするためのステップを議論する

観光学部2年 宇田朱純、柏木大和、加田瑞稀、村井美南、渡邊真優

観光学部1年 東彩花、山口あいり



LPPについて

私たちは海南市の中でも北西にある大崎地区を主な活動地としています。活動は大崎でのイベントをお手伝いしたり、今年は昨年度から制作を続けてきた大崎ガイドブックの完成を目指したりなど積極的に活動をしました。また、大崎LPPのインスタを創設し、魅力を発信したり、大崎の魅力を多くの方に知ってもらうために、大学祭での模擬店出店にも挑戦したりなどしました。

宿泊体験

6月28日、29日に実際に大崎を訪れ宿泊研修を行いました。

1日目はかざまちのピザ窯をお借りして大崎の皆さんに手伝ってもらいながらピザパーティを開き、皆さんのお話を伺いました。次の日は朝シーカヤック体験をさせていただき午後は頂いたお魚とかざまちのお弁当をいただきました。この2日間の貴重な体験を通してとても有意義な学びを得ることができました。



ブルーベリー

今年度も大崎で一般の方向けにブルーベリー摘み取り体験が行われました。私たちも体験のサポートをまわるとともに今年はブルーベリーを使ったスムージーを販売しました。スムージーの開発のために何度もミーティングや試作を重ね、当日は多くの方に良い評価をいただきました。大崎のブルーベリーを最大限活かすにはどうすればよいか全員で考え、販売するという貴重な経験をすることができました。



大学祭

11月17日の大学祭2日目には、かざまちのタコ焼き機をお借りして、大崎産の地だこを使って作ったこ焼きを販売しました。最初は、時間が足りなかったり、焦がしてしまったりと思い通りに販売を進めることができませんでした。しかし、徐々に上達していき、目標販売数を超えることができました。大学祭をやり遂げたことで、達成感を感じ、皆と喜びを共有できたため、かけがえのない思い出になりました。



ガイドブック

昨年度から制作を続けてきた大崎ガイドブックが完成しました。制作するにあたり、文章の構成やレイアウトなど自分たちで考え、誰もが大崎を訪れたいようなものになるように制作しました。このガイドブックには私たちが考える大崎の魅力や私たちの大崎に対する思いがたっぷり詰められています。たくさんの方にこのガイドブックを手にとってもらって大崎の魅力を感じてもらい、「実際に行ってみたい!」と感じてもらえれば、とてもうれしいです。

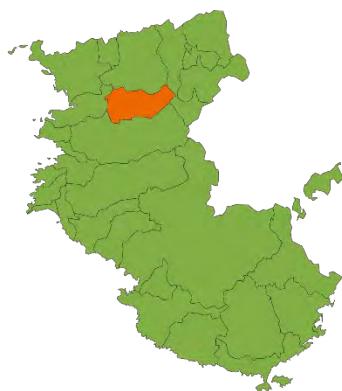


まとめ

昨年度から制作を続けてきた大崎ガイドブックが完成し、多くの人に大崎の魅力について知ってもらいいいきっかけになりました。また、大学祭での模擬店出店は準備から始まり、大変なことがたくさんありましたが、大崎の方々やメンバーと力を合わせて、素晴らしい一日にすることができました。私たちにとって、大崎はふるさとのような場所であり、心の拠り所でもあります。今後も、この素晴らしい場所が永続的に地域の方に愛されるだけでなく、より多くの方に愛される場所になることを目標に活動を続けたいです。

和歌山県海草郡紀美野町

地区×学生による観光・文化・交流情報発信と棚田の再生



【活動の基本情報】

参加学生数:12 名

(1 年生:2 名、2 年生:6 名、3 年生:4 名)

活動期間:2018 年 4 月～2025 年 1 月

担当教員:山岸大二郎

1. 活動実施の経緯

中田地区にある棚田を再生しようと新たな活動(中田の棚田再生プロジェクト)が開始し、小川地域外からの住民が耕作放棄され荒れた土地を棚田として蘇らせようと活動してきた。高齢化による地域活動の減少、離農や離農による耕作放棄地の増加などの課題を抱えるなか、様々な立場や世代の方と交流しながら活動を進め、棚田から広がる地域の活性化に繋がるよう取り組んでいる。

2. 活動の内容

今年度は、月に 1～3 回程度は棚田に訪れて活動し、棚田再生プロジェクトに関わる多様な関係者と交流を深めることにできた。また、昨年度から実施してきたインスタグラムの投稿分析の結果を、7 月に阪南大学で行われた観光学術学会でポスター発表をした。この調査を通して、より多くの観光客が「# 中田の棚田」についての投稿をするようになってきていることが明らかとなった。

さらに、12 月には、「出会い・協働・学びの場としての中田の棚田」と題した報告会を実施し、参加学生は自分の興味関心あるテーマで中田の棚田を対象に実施した研究内容を報告した。学際的な研究分野である観光学を専攻する学生らしく、調査テーマが多様であったこともあり(例えば、責任ある観光、地域愛着、棚田の音・サウンドスケープ、生涯学習の場としての棚田など)、地域からは「様々な視点で棚田を考えることができた」といった感想をいただくことができた。

3. 活動を通じて

棚田という場所で、学生は棚田再生にかかる知識やスキルを身に着けるだけでなく、大学の座学で学んだ専門的な理論や知識を実験的に応用することで、それら専門知識の理解促進につなげてきた。活動終盤に、報告会を実施することで、学生は大学で学んだことを活かし、新たな視点を地域に提供することを意識しながら、活動に取り組むことができた。

4. 成果ポスター

紀美野町小川LPP

地区×学生による観光・文化・交流
情報発信と棚田の再生

ここが 私のアナザースカイ。

紀美野町小川地区

和歌山県の北部に位置する紀美野町。そのなかでも壮大な自然に溢れる小川地区。中田の棚田をはじめとした観光地が存在します。近年、その自然に魅せられ、多くの観光客や移住者が訪れるようになっていきます。

小川LPP

私たちは4回生1名、3回生4名、2回生6名、1回生2名で活動しています。学生視点での地域振興を目標とし、現地の方々との意見交換などを行いながら、地域の課題解決に向けて活動しています。

2024年度の主な活動

- 中田の棚田再生プロジェクトへの参加
 - ・草刈り、畦崩し、土寄せなど、棚田の整備活動を行いました。
 - ・棚田で開催される田植えイベントや収穫祭に参加しました。活動を通して棚田再生プロジェクトメンバーの方や活動に参加される方々と交流を深めることができました。
- イベントの運営
 - ・自分たちが主体となって地域で行うイベントの企画・運営に挑戦しました。
 - 小・中学生をターゲットに設定し、「教育×自然」をテーマにしたウォークラリーイベントを企画しました。中田の棚田再生プロジェクトメンバーからの意見を踏まえて問題作成やルート設定を行いました。当日は小規模ながら実際に小学生を招きイベントを開催させることができました。イベントの運営を行う中で得た学びを来年度の活動に活かします。
- 研究発表会
 - ・メンバーそれぞれで中田の棚田を調査対象とした研究を行いました。調査によって得た研究結果をまとめ、地域の方々を招いた研究発表会にて発表を行いました。研究発表会は、研究発表に対して、地域の方々から直接フィードバックを得られたり、相互間の考え方を共有することができたりと、有意義な時間となりました。

研究テーマ紹介

メンバーが行った研究内容を一部紹介します。

- ・中田の棚田訪問者のSNS利用に関する意識調査
- ・棚田をフィールドとした生涯学習
- ・SNSに投稿された写真から読み解く中田の棚田の魅力と可能性
- ・地域を“人”を動かすイベントの役割

来年度の活動方針

1. 地域資源を活用した教育観光の推進
季節ごとに、中田の棚田に関する問題を作成し、ウォークラリーなどのイベントを通じて、地域の魅力を体感できる教育観光を促進する。
2. 学びと現地活動の相互連携の深化
先行研究や他地域の事例を調査し、学びを現地活動に活かして地域へ還元する。

フィールドワーク(5月)



田植え(6月)



ウォークラリーイベント(10月)



研究報告会(12月)



稲刈り(10月)



小川LPP
Instagram



中田の棚田
再生プロジェクト
Instagram





wakayama
univ.

和歌山県有田市

多世代で取り組むまちづくり



【活動の基本情報】

参加学生数: 5 名

(1 年生: 2 名、2 年生: 1 名、4 年生: 2 名)

活動期間: 2023 年 6 月～2025 年 1 月

担当教員: 永瀬節治

1. 活動実施の経緯

有田市箕島地区では、平成 29 年度より有田市社会福祉協議会や箕島地区の地域活動団体と連携しながら、多世代交流を通じた地域活性化に向けた活動に取り組んでいる。コロナ禍となった令和 2 年度からはオンラインによる交流機会の創出やワークショップなどに取り組み、令和 4 年からはそれらの成果を活かし、現地でのスマホ講座をはじめとした多世代交流、地域コミュニティの活性化に関する活動を行なっている。

2. 活動の内容

昨年度から引き続き、有田市社会福祉協議会や公民館等との連携により、高齢者を対象に、日々の生活に役立つスマートフォンの使い方を楽しみながら学んでもらう「スマホ講座」の企画運営に取り組んだ。また、有田市内で防災教育に取り組むマモッチャクラブとの連携による防災イベント「あそぼうさい」の企画運営にも取り組み、地元の小学生やご家族の方々にご参加いただきながら、防災グッズの展示や手作り体験等を実施した。学生たちも防災に関する知識や認識を深めるとともに、地域の方々と交流する貴重な機会となった。また有田市社会福祉協議会が主催する地域づくりに関するワークショップにも参加し、地域の方々の意見を引き出すための工夫についても学ぶ機会となった。

3. 活動を通じて

今年度は継続して参加する 4 回生 2 名によるフォロー体制のもと、新たに加わった 2 回生 1 名と 1 回生 2 名による活動となった。これまでの経験を活かしながら、SNS や現地での関係者との円滑なコミュニケーションを図り、多世代交流を軸にした密度の高い活動に取り組むことができた。最終年度のため本テーマによる LPP の活動は一区切りとなるが、新たな活動の可能性について、地域の関係者と意見交換を行い検討する予定である。

4. 成果ポスター

有田箕島LPP

27151035荻野明穂 27151117宮坂真菜美
T2310090松井遼介
T2410077橋本幸 T2410078橋本怜奈

有田市箕島とは？

有田市は和歌山県北西部に位置しており、人口は約2.7万人です。有田みかんの産地として有名であり、その他にも太刀魚やしらす、なれずしなども特産品です。

スマホ講座

一昨年から開催している箕島地区に住む高齢者を対象としたスマホ講座を今年度も実施しました。このスマホ講座の目的は、高齢者が学生とともにスマートフォンの使い方を楽しみながら学び、日常生活において有意義に活用してもらうことです。今年度のスマホ講座も好評であり、参加者からは今後の継続を期待する声も上がりました。



あそぼうさい

12/7に有田市で活動するマモツチャクラブと防災イベントを開催しました。楽しく防災について学び、備えてもらうことを目的としています。非常食やペットボトルランプの展示、新聞紙で作ることができるグッズなど、様々なブースに分かれて災害時に役立つことを学んでもらうことができました。小学生だけではなく家族で来てくれる人やお年寄りなど、想定より多くの人に楽しんでもいただきました。

今年度の振り返り

今年度は昨年度に比べ5人での活動になりました。昨年度に比べ人数が増えたことで活動にメンバー全員が参加できることも少なくなかったです。しかし、次の会議で情報共有から始めるなど、メンバー間での情報共有はよくできていたと感じています。

ワークショップ（1/26開催）

今年度のLPP自主企画として提案したワークショップです。今年度は有田市社会福祉協議会の主催するワークショップに同席させていただき、アイスペイクや住民の方の意見を引き出す役割などでお手伝いすることになりました。

和歌山県有田市

青みかん(摘果みかん)の価値を上げる



【活動の基本情報】

参加学生数:16 名

(1年生:5名、2年生:3名、3年生:4名、4年生:4名)

活動期間:2020年6月~2025年1月

担当教員:岸上光克、永瀬節治

1. 活動実施の経緯

有田みかんの産地である有田市宮原地区では、収穫前にみかんの大きさを揃えるために成りすぎた果実を減らす作業(摘果作業)によって捨てられている「青みかん」「摘果みかん」の価値向上に向け、地域の方々と学生たちの協働による活動を、令和2年度にLIPとして開始した。令和4年度からは宮原青みかんLPPとして、青みかんを活用した商品開発や、その価値を広める取り組みを、地域交流拠点「宮原さん家(ち)」をはじめ、地域内外でのイベントなどの機会を活用しながら積み重ねてきた。

2. 活動の内容

今年度は、青みかんの摘果作業や地域のイベントへの参加等の取り組みを継続するとともに、これまでに準備を進めてきた青みかんを活用した商品開発のうち、有田市内の醤油醸造業者との連携による「青みかんポン酢」を数量限定商品として実際に商品化することができた。また、地元の洋菓子店との連携による青みかんを使ったバームクーヘンについては、今年度内の商品化までには至っていないものの、その手前の段階まで準備を進めることができた。

3. 活動を通じて

今年度は、LIPとして活動を開始してから5年目の最終年度となり、新規メンバーと継続メンバーを組み合わせたチームにより、これまでの活動や成果の蓄積の上に、青みかんを活用した商品を実現することができた。これまで、青みかんに関する知識や経験を、現場での作業を通じて習得しながら、地域内外のイベントへの参加、商品化に向けた試作品づくり、クラウドファンディングの実施など、地域の関係者の熱意とご尽力により、学生たちにとっても深く充実した経験を重ねることができた。毎年参加学生の人数も多く、複数の企画が動く中で、学生間や地域の関係者とのコミュニケーション、地域の現場での動きや情報発信など、反省や試行錯誤を繰り返しながらも具体的な成果を積み上げることができたと考える。LPPとしての活動は一区切りとなるが、青みかんの価値を高める取り組みへの今後の学生の関わり方については、学生と地域の関係者の意向を踏まえながら、方向性を見出したい。

5年間にわたり、地域での活動への思いを持ちつつも未熟な学生たちに対し、さまざまなご指導、ご支援を賜り、多くの貴重な学びの機会をご提供いただいた地域の関係者の皆様に、あらためて感謝申し上げます。

4. 成果ポスター



宮原青みかんLPP 活動報告

私たちは有田みかんの生産途中で間引かれて、本来捨てられてしまう摘果みかん(青みかん)の価値向上を通じた地域活性化を目指して活動を行いました。LPP最後の年となった今年度は今までの活動の総決算として、商品開発を中心に、様々な活動に力を入れてきました。

1 宮原盆BON祭り屋台出店

昨年に引き続き、8月に有田市宮原で開かれた、宮原盆BON祭りに参加し、青みかんサイダーの販売を行いました。多くの地域の方に青みかんサイダーを購入していただきました。このお祭りを通して、自分たちの活動や、青みかんのことについて知ってもらえることができましたと思います。



4 スイーツ開発

スイーツ班では、有田市の洋菓子店と青みかんバームクーヘンの共同開発に取り組みました！商品の完成は実現しなかったものの、スイーツの種類や流通先によってターゲット層を明確化したり、実際に工場に見学に行き、バームクーヘンが商品になる過程を見せていただいたり、多くのことを経験することができました。



2 青みかんぼん酢商品化

以前より則岡醤油醸造元さんと共同開発に取り組んでいた青みかんぼん酢が、遂に商品化されました！完成した青みかんぼん酢は、有田市の産直市場だけでなく、和歌山大学生協購買店などでも販売を開始しています。今後も販売場所は増えていく予定です。学生と企業が試行錯誤を重ねて完成した商品を、是非手に取ってみてください！

5 地域でのイベント企画

企業と学生により開発された青みかんぼん酢を使用した料理を、実際に地域の人に食べていただくという目的を含めた、地域の小学生との交流イベントを開催する予定です。午前中には小学生と餃子を手作りし、青みかんぼん酢と一緒に食べていただいた後、午後にはレクリエーションを開催予定です。地域住民との交流を深めるだけでなく、自分たちの活動をより多くに人にお伝えし、青みかんぼん酢を手にとっていただきたいと思います！

3 青みかん摘果作業参加

実際に農家さんの畑に出向いて、青みかんの摘果作業を体験しました。作業を通して、青みかんのことや、みかん栽培の大変さについて知ることができました。



6 今後の展望

LPPとしては、今年度が最後の活動となりました。しかし、今後とも地域の方々と連携し、何か活動を起こしていけたらいいなと思っています。今後の活動については地域や大学と検討中です。

インスタのフォローも
お願いします!!



和歌山県有田郡湯浅町

湯浅の若者と共につくる本気の商品開発！



【活動の基本情報】

参加学生数：7 名

(1 年生：2 名、2 年生：3 名、3 年生：2 名)

活動期間：2023 年 5 月～2025 年 1 月

担当教員：山岸大二郎、岸上光克

1. 活動実施の経緯

湯浅町は人口1万人の小さな町だが、醤油産業発祥や金山寺味噌などの発酵文化のメッカであり、有田みかんなどの柑橘類をはじめとした農作物や、県内屈指の漁獲量を誇るシラスやワカメ、全国でも有名な紀州鴨の養鶏場があるなど、第一次産業の魅力に溢れた地域である。ただ人口減少が進み、地域の若い担い手も減っており、地区内の住民だけでは新たな取り組みがなかなか生まれていないのが現状である。地域外の人や若者との接点を増やすことで新たな視点と繋がりが増え、衰退していく地区の新たな取組の一步になると考え、その目的を達成するために湯浅町の田村地区の若者がつくった任意団体「田村協議会」がある。本プログラムは、田村協議会のメンバーと協働で商品開発に取り組んだ。

2. 活動の内容

地域内の若者と連携し湯浅町の新たな商品開発に向けて活動してきた。元々、ふるさと納税の商品開発を目指していたが、ふるさと納税制度が変化したことから、昨年度開発したハンバーグの販売方法をふるさと納税に限らず、オンラインショッピングやイベント出店などで販売できるように取り組んできた。土産物や特産品のオンラインショッピングの利用動向を探るために、アンケート調査なども実施した。その結果をもとに、受け入れ地域の担当者らと協力して、イベント出店や販促の戦略を立てることを行った。

3. 活動を通じて

実際にマーケティングなどの経験のある地域の若者から、マーケティングや商品開発におけるプロセスを学ぶことができた。また、大学での週1回のミーティングを通して、学生間のチームワークを強め、プロジェクトを協働して進めることができた。さらに、地域に足を何度も運ぶことで、地域との連携を深めることができ活動の支援を活動の関係者外からも得ることができた。残念ながら、計画通りに進まないことも多々あったが、活動を通して、商品開発の難しさを実感するきっかけとなった。

4. 成果ポスター



和歌山県有田郡広川町

和歌山県広川町の地場農産物を活用した新商品の開発



【活動の基本情報】

参加学生数:5 名

(1 年生:3 名、2 年生:2 名)

活動期間:2024 年 5 月～

担当教員:佐々木啓

1. 活動実施の経緯

広川町は、1854 年の安政南海地震で発生した津波が押し寄せた際に濱口梧陵が稲わらに火を付け、津波の襲来を村人に知らせて避難を誘導した逸話「稲むらの火」で世界的に知られる。しかし現状、有田みかん以外に目立ったものがなく、新たな特産品の開発が望まれている。そんな中、広川町の新たな特産物にしようと小麦を栽培する農家が現れはじめており、この小麦を軸として、町内で農産物等を活用した商品開発を行うことを目的に活動を始めた。

2. 活動の内容

- 事前学習:経営学書籍の輪読、商品開発事例および商品開発に関する先行研究の収集
- 現地研修 1:小麦の製粉、ピザ作り体験、町内の観光施設指定管理者(株式会社フラット・フィールド・オペレーションズ)へのヒアリング(9/10-11)
- 現地研修 2:稲むらの火祭りの運営補助、マルシェへの参加(10/19)
- 事後学習:LPP 内での活動報告会(商品開発事例の調査、競合商品「稲むら最中」の分析、商品の案、発売までのスケジュール)

注)本 LPP では、2024-2025 年度の 2 年計画で商品開発を目指している。参加学生は 5 名(1 年生 3 名、2 年生 2 名)。

3. 活動を通じて

- 活動の成果物:商品企画案「広川町に新たな特産物を！～わだいきららフード～」
 1. つゆあかねジャム×スコーン(※つゆあかね:梅×スモモの新種の果実)
 2. はっさく×タルト
 3. はっさく×ベーグル
- 次年度は、町内でのマルシェイベントへ出店し、そこでの商品販売を目指している。

4. 成果ポスター



【2年】大和海、井上華

【1年】森心優、菅田愛理、島津咲希

広川町とは

和歌山県の中央北寄りに位置し、有田郡に属する人口約6300人ほどの町

有名スポット

濱口五稜にまつわる稲むらの火の館や、西広海岸というビーチが夏には多くの家族連れが訪れます

活動内容

2回生2人、1回生3人の計5人で活動しています。小麦を栽培している農家さんと一緒に小麦粉を利用した広川町の特産物を作ろうと考えています。



宿泊研修

9月10,11日に活動メンバー全員で現地へ訪問しました。栽培されている小麦がどのようなものなのか、小麦から小麦粉になるまでの過程を実際に体験させてもらいながら学びました。小麦粉を実際に使用した生地からピザを作らせていただいたり、広川町に関わる多くの方とお話させていただいたりしました。貴重な体験ができたとともに広川町という場所の雰囲気を知ることができた2日間でした。

稲むらの火祭り

1854年の安政の大地震による津波の際、濱口梧陵は稲むらに火を放ち村人を安全な場所に避難させ救命活動を行い、村の復興に尽力しました。彼の功績を後世に伝え、地震・津波の防災士気を高めるため、2003年から「稲むらの火祭り」が開催されています。「稲むらの火祭り」では人々が松明を持ち、広川町役場から津波の際の避難所となった廣八幡宮まで行列を行っており、私たちも住民の方々と一緒に行列を行いました。

商品企画に向けて

・ホテル「いさり」レストラン「潮香」
広川町が所有する国の登録有形文化財「旧戸田家住宅」を舞台としたオーベルジュ

・小麦を利用した商品開発



つゆあかね
ブルーベリー
じゃばら
etc...

次年度に向けて

今年度は地域のイベントに参加したり、論文を読み、商品開発の事例研究に取り組みました。来年実際に商品企画を行っていくにあたり、事例研究やアイデア出しに引き続き力を入れていきます！また、一緒に商品開発を手伝って頂く方を見つけるため、人と関わる機会を増やしていきたいです。

和歌山県日高郡美浜町

美浜町の資源を活かした観光誘客



【活動の基本情報】

参加学生数:23 名

(1年生:9名、2年生:4名、3年生:5名、4年生:5名)

活動期間:2023 年 6 月～2025 年 1 月

担当教員:東悦子

1. 活動実施の経緯

2019 年度から 2022 年度までの LIP 及び LPP では、美浜町のカナダミュージアムを拠点に子供を対象とした夏イベントの開催や Instagram による情報発信を行った。続く 2023 年度は、それまでの活動を活かして、美浜町の情報発信を継続し、煙樹海岸キャンプ場で子供向けクリスマスイベントを実施した。また紀伊日ノ御崎灯台のパンフレットも作成した。2024 年度 LPP では、町制施行 70 周年を迎える点も踏まえ、美浜町の PR や町内観光スポットでのイベントの実施など「美浜町の資源を活かした観光誘客」をテーマとした。

2. 活動の内容

2024 年度の LPP 美浜町は総勢 23 名であった。大人数のため班に分かれて活動を行い、適宜 Teams 上に企画や議事録を格納して共有した。全員が取り組む活動としては、美浜町町制施行 70 周年記念年イベントであった。まず班活動では「DIY(空き家活用)班」は古民家リノベーションのラーメン店舗の施行に関わり、「体験型コンテンツ班」は美浜町でのサイクリング経験をもとに、大学線目線で伝えるサイクリングマップを作成した。「イベント班」は健康をテーマにラジオ体操やクイズを取り入れたイベントを開催した。次に、町制施行 70 周年イベントでは、これまでの LPP の活動紹介、学生作成のパンフレットや美浜町観光パンフレットの配布などを通して、多数の来場者―地域の人々や旅行者―と交流した。



70 周年記念事業・美浜町役場の方々と学生 22 名

3. 活動を通じて

2024 年度も継続メンバーが多く、5 名の 4 年生に代わって 3 年生や 2 年生が進んでリーダーや副リーダーを務めた。これまでの活動経験が各自の自信につながっている様子がうかがえた。他方、新規メンバーは初めてゆえに美浜町を知るために、現地に赴く機会を積極的に活用し経験から学ぶ点が多かったようだ。本年度でしか経験できない美浜町町制施行 70 周年イベントには、23 名中 22 名が参加できた。それまで大人数でコミュニケーションを図る難しさも経験したが、その日は、多くの下級生にとって、4 年間 LPP 美浜町に携わった上級生の堂々とした活動の姿や美浜町役場の方々といかに良い関係性を築いているかを知る機会になったといえる。

2 年を経て本プログラムは終了するが、美浜町での新たな活動が始動することを願いたい。これまで常に学生を支えてくださった美浜町役場の田中敦之様、網中千花様、山口剛様をはじめ関係の皆様にご心よりお礼申し上げます。

4. 成果ポスター

2024年度 美浜町LPP

美浜町について



和歌山県日高郡の町である。煙樹ヶ浜キャンプ場、日ノ御埼灯台、カナダミュージアムが主な観光目的地として挙げられる。煙樹ヶ浜の松林は、全町4.5kmにも及び近畿最大の規模を誇る。三尾地区からは明治時代に多くの人がカナダに出稼ぎに行ったことから移民の町としても知られている。2024年に町制施行70周年を迎えた。

WE LOVE MIHAMAシーサイドフェス

2024年12月1日に和歌山県美浜町の町制施行70周年記念イベントでは、ブルーインパルスによる展示飛行をはじめ、美浜町出身の芸人やミュージシャン、陸上自衛隊第3音楽隊によるステージや多くの屋台が並んだ。LPP美浜町のこれまでの活動報告を行い、美浜町の観光パンフレットの配布や美浜町限定コラボキティちゃんの販売などのサポートを行った。このような活動を通して、美浜町の方々だけでなく観光客の方とも交流することができた。

DIY活動

古民家リノベーション店舗「みおラーメン」の施工に伴い、DIYワークショップが開催され、私たち学生も参加した。廃材になるはずだった木材を店舗の資材に利活用した。地道な作業ではあったが、それゆえに完成した時の愛着や達成感は大きかった。



サイクリングマップの作成

実際に美浜町でサイクリングをした経験をもとに、大学生目線で美浜町の魅力を伝えるサイクリングマップを作成した。若者をターゲットとしたマップには、美浜町を訪れた際、是非そのまま生かしてもらいたい場所を私たちが撮影した写真やコメントと共に掲載している。

活動の振り返り

4学年総勢23名という過去最多のLPP美浜町であった。その為、日程調整が難しかったが、様々な活動ができた。前期はミーティングを中心に進めたが、各班に分かれて活動にも参加した。町制70周年記念イベントという大切な日には、私たちも携わることができた。活動を通して、多くの貴重な体験をすることができた。美浜町が多くの人に愛されていることを感じた。

和歌山県東牟婁郡那智勝浦町

中山間地域における地域ハブ(HUB)の役割と

可能性を考える



【活動の基本情報】

参加学生数:4 名

(2 年生:2 名、3 年生:1 名、4 年生:1 名)

活動期間:2023 年 6 月～2025 年 1 月

担当教員:八島雄士

1. 活動実施の経緯

那智勝浦町色川地区は、40 年以上前から移住者受入を地域主体で行ってきた中山間の集落である。「らくだ舎」(受入役の千葉さんが経営者)が、9つの区からなる色川地区のハブ(ヒトやモノが集まり、交流が生まれる場所)となっており、「棚田守ろう会」などの活動推進にも寄与している。地域づくりにおけるハブの役割と可能性を考えることを目的に、参加学生が LPP の活動を実施した。

2. 活動の内容

実際の活動は、地域の雰囲気を感じ、参加者がそれぞれに問いを立て、主体的に行動する方針で実施した。

具体的には、立地(和歌山大学から片道 200km)に配慮して、オンラインで勉強会や打ち合わせを実施したのち、現地のキックオフとして地域の寄合に参加した。現地施設や棚田などの見学、色川の「おまぜ」(伝統料理)などを食事しながらの会食に教員を含めて参加した。寄合には小阪区以外の他の区の方も参加され、住民の方々と意見交換を行ったが、参加学生と住民が知り合い、地域に受け入れていただける良い機会となった。

次に、学生だけの活動として、「環境共生の会」という寄合に参加し、発表や意見交換する活動を行った。この会は、もともと環境に配慮した生活はされているなかで、より環境負荷の少ない暮らしを実現するための取り組みを考えることが目的となっている。実際に参加した学生は、電動自転車を用いることによる自動車を使わない移動、庭へのソーラーパネルの設置、小水力発電への取り組みなどを知ることができ、さまざまな観点から環境配慮ができることを学ぶ機会となった。

3. 活動を通じて

LPP の活動を通じて、参加学生は、色川の住民がより魅力的な地域にしようと積極的に活動していることからさまざまな学びがあった。1つ目に、新しいことにチャレンジするエネルギーを感じることができた。2つ目に、多様な知識や経験を持つ移住者が多いことが色川の強みだと気づくことができた。3つ目に、一つの方向性で進んでいく困難がある反面、リーダーシップが活力を生み出すきっかけとなっている現実を知ることができた。

この2年間の活動のなかで、1年目は全国棚田サミットを色川の棚田を舞台に実施する手伝いをしたことで、色川地区への外からの視点を学んだ。2年目は、寄合や会合に参加することによって色川地区の内の視点を学んだ。これらの活動を通じて、「らくだ舎」に集うことのみならず、集う人々そのものが「地域のハブ」となっていることがわかった。参加学生は、自覚と誇りを持って活動されている色川住民の方々との交流を通じて、単純な活動のお手伝い以上の深い学びが得られた。

4. 成果ポスター

和歌山大学観光学部 地域連携プログラム（LPP）2024

那智勝浦町色川地区



中山間地域における地域ハブ（HUB）の役割と可能性を考える



和歌山大学



那智勝浦町

色川地区について

那智勝浦町色川地区は、那智勝浦町の中心部から山間部へ車で30分ほど走った所に位置する、9つの区から成る、人口が300人ほどの小さな地域です。かつて盛況していた鉱業が1970年代に廃止となり、地域の人口は外部へと流出していききました。しかし、同時期より外部からの移住者を積極的に受け入れ、現在では地区全体の人口のおよそ半分以上を移住者が占めるまでにになりました。地域資源としては、美しい棚田や茶畑が有名です。特に「小阪の棚田」は、一度休耕田となった棚田を移住者を含む地域住民が主体となり再興させ、現在も関係人口の方々などを交えた保全活動が定期的に行なわれています。



活動報告

地域の寄合に参加

7月13日、14日の2日間今年度初の訪問で2日間滞在しました。1日目は悪天候の中、棚田を始めとする地域の施設を見学し、2日目には地域の寄合にも参加しました。「おまぜ」と呼ばれる色川で昔から作られている料理をはじめ、準備から片付けまで住民の方と行うことで地域に関する様々なことについて聞くことができ、貴重な経験となりました。



「環境共生の会」とは

色川では「環境共生の会」という集まりがあります。環境問題について深く考え、色川で環境負荷の少ない暮らしを実現させようと、「環境共生の会」では様々な取り組みが行われています。私たちは実際の寄り合いの場に参加させて頂くことが出来ました。

【取り組みの例】

- ・ 自動車を使わない移動の実現(電動自転車を用いる)
- ・ 庭にソーラーパネルを設置する
- ・ 小水力発電所を作る(まだ実現途中) etc...





実際に参加してみても

色川では住民の方々がより魅力的な地域にしようと積極的に活動しており、新しいことにチャレンジするエネルギーを感じました。地域内に多様な知識や経験を持つ移住者が多いことも色川の強みだと感じました。一方で様々な考え方が存在する中で、一つにまとまり進んでいくことの難しさとリーダーシップの重要性を実感しました。



今年度の活動を経て

昨年度は、「色川」を「外」の視点から学ぶことが出来ました。「全国棚田サミット」が那智勝浦町で開催され、地域の方たちと一緒に運営に携わらせて頂きました。1年を通して、中山間地域とは、色川とはどういう地域なのか、深く知ることが出来たと思います。今年度は昨年度に比べ、より「色川」を「内」の視点から学ぶことが出来ました。「環境共生の会」という地域の寄り合いに参加させて頂き、色川で暮らす人々がいかに色川をどのような地域にしていきたいのか、「色川の未来」について考え行動していることが分かりました。

この2年間の活動を通して、色川における中山間地域の【HUB】とは、【色川について考え、その思いを共有することが出来る寄り合いの場】ではないかと考えました。自身が今暮らしている地域について思いを馳せ、それを共有し合い実行できる場があることで、「色川」の住民であることに自覚と誇りを持つことができ、「色川」で暮らす人々の心を繋ぐことが出来ているのではないのでしょうか。色川での活動を通して、ここでしか出来ない学び、発見を得ることが出来た貴重な2年間になったと思います。

和歌山県新宮市

新宮市を訪れる観光客のニーズ調査・分析及び

コンテンツ発掘・発信



【活動の基本情報】

参加学生数:9 名

(1 年生:5 名、2 年生:3 名、3 年生:1 名)

活動期間:2024 年 5 月～

担当教員:出口竜也

1. 活動実施の経緯

2024 年は「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産登録 20 周年の節目の年であり、2025 年は大阪・関西万博の開催が予定されるなど、新宮市においても国内外からの観光客の増加が見込まれることから、魅力的な映像コンテンツを作成し、発信することを目的に、2 カ年計画で始まった活動である。

2. 活動の内容

新宮市商工観光課の担当の方を交えたオンラインミーティングを定期的に重ね、1 泊 2 日の新宮市における現地調査を 9 月と 12 月に実施することで、地域資源の発掘、撮影、地域の関係者との意見交換などを行った。現地調査終了後は映像コンテンツの編集と Instagram のアカウント作成を行い、順次投稿するとともにフォロワー獲得のための活動を行っている。

3. 活動を通じて

9 名の参加学生のうち 8 名が LPP 初参加の 1・2 年生だったため、徐々にグループ活動に慣れることから始めたが、2 回の現地調査をきっかけにして結束力が強まった。多様な地域出身の学生が集ったことで新宮市の魅力をさまざまな観点から探ることができ、役割分担も学生間で自主的に行うことで誰一人脱落することなく今年度を終えることができたのは一定の成果であったと考えている。来年度は思わず現地に行きたくなる映像コンテンツのさらなる磨き上げとフォロワーの獲得作業に本格的に着手する予定である。

4. 成果ポスター

新宮市 L P P

永田理子 山口朔人 狩野美咲 小野寺菜々子 井上紗菜 松田彩花 服部天音 森川翔貴 芝芽衣

新宮市の概要



新宮市

人口: 25,822人(2025年1月1日現在) 面積: 255.23km²
 和歌山県の南東部に位置しており、JR和歌山駅から特急くろしおで約3時間で行くことができます。市内には、熊野速玉大社をはじめとする熊野三山に関連する世界遺産が街の至る所にあり、
歴史、文化、自然、食、すべてが楽しめる穏やかな街です。

第1回 訪問日 2024年9月15、16日

新宮市の主要な観光地を観光客目線で巡り、まずは自分たちが「新宮市」について知ることを目的として訪問しました。初めて新宮市を訪れるメンバーが大半であり、現地の自然、人柄、食べ物など様々な街の風景に大きな刺激を受けました。

第2回 訪問日 2024年12月7、8日

新宮市の「自然」「公共交通機関だけで回る」「サイクリング」に注目した3つの班に分かれ、それぞれ動画を制作しました。また、よりリアルを楽しんでもらうためにVlogなどのフラットな動画も制作しました。2回目だからこそ視点でより深い現地活動になりました

現地活動



(静峡)

その他の活動



(ミーティングの様子)

①ミーティング

週に1度は集まり、訪問の計画や動画やSNSの方向性について話し合いを重ねました。

②外国人観光客調査

2024年12月3日に和歌山城で外国人観光客を対象に聞き取り調査を実施しました。和歌山に来た目的や観光地を調べるにあたって使用したアプリやツールなどについての質問し、その結果を動画づくりやSNS運用参考に活用しました。

和歌山市の観光案内所や外国人観光客10組ほどにお話を伺うと同時に、新宮市LPPのSNSアカウントの普及も行いました。

③動画勉強会

YouTubeやTikTokから各自動画を持ち寄って真似したい点などを話し合い、動画づくりの参考にしました。

①現地実習

土日休みのお店が多い特徴などを踏まえ、長期休暇の平日訪問を行いたい。また、地域の人と交流できる機会をさらに増やし、外から来た人そして地域の人、双方からの視線を取り入れた動画づくりを行っていききたいです。

②常時活動

積極的なSNSの投稿を用いた分析や新宮のアカウントの拡大を行っていききたいです。また、観光地における外国人観光客、日本人観光客へのニーズ調査を計画的に行い、LPP作成の動画を利用したプロモーション活動を行っていききたいです。

③動画制作

様々なジャンルの動画制作(ショート、長編、Vlogなど)を続け、SNSや評価の得られるものにアップデートし、ブラッシュアップしていききたいです。また、外国人観光客に着目した動画の制作や配信を行っていききたいです。

今後の活動



(桑ノ木の滝)

2024年度 和歌山大学観光学部LPP合同報告会

新宮市LPP
インスタグラムアカウント



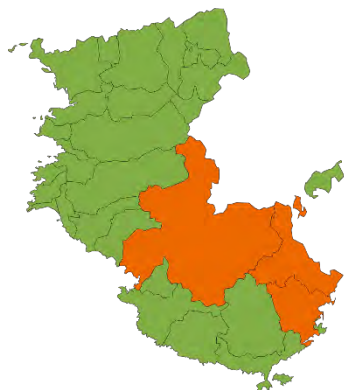
SHINGU_LPP

和歌山県新宮市、田辺市、東牟婁郡那智勝浦町

世界遺産登録 20 周年イベント

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」を学び、

熊野を盛り上げよう。



【活動の基本情報】

参加学生数: 5 名

(1 年生: 2 名、2 年生: 2 名、3 年生: 1 名)

活動期間: 2023 年 6 月～2025 年 1 月

担当教員: 佐野楓

1. 活動実施の経緯

令和 3 年度の熊野三山観光者調査によると、若年層 (18～34 歳) は全体の 3.7% しか訪れていなかった。そこで、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」が 2024 年 7 月 7 日に登録 20 周年を迎えるにあたり、若年層をターゲット

に 20 周年を盛り上げる事業の立案・運営に取り組んでほしいという依頼を受けた。

2. 活動の内容

今年度は立案された「まちあるきマップ」と「デジタルスタンプラリー」の実施に加え、Instagram や TikTok の運営、チラシの作成やラジオ、テレビの出演といった広報活動といった取り組みを進めた。

また、2 月には SNS のインサイト分析や参加者アンケート結果を基に、関係者に向けた成果報告会を行い、事業の成果と熊野三山の今後の展望についても考察した。

3. 活動を通じて

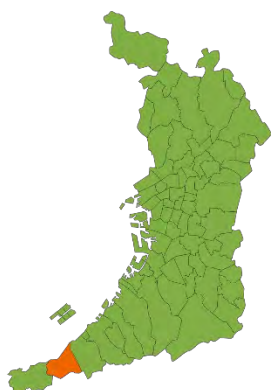
前年度が企画立案、今年度がパンフレット等の制作と SNS 運営という計画であったが、京産大、和太ともにメンバーが大幅に入れ替わり、また今年度の活動が 5 月からという比較的早い段階から始動したため、引継ぎや今年度のスケジュール作成が活動と並行しての取り組みとなってしまった。当初の目標は達成することができたが、2 カ年計画ということもあり、1 年目の時点でもう少し詳しく予定を組んでおくべきだったと感じた。

4. 成果ポスター



大阪府阪南市

阪南市の産業振興と魅力発信



【活動の基本情報】

参加学生数: 8 名

(1 年生: 4 名、2 年生: 2 名、3 年生: 2 名)

活動期間: 2023 年 6 月～2025 年 1 月

担当教員: 佐々木壮太郎

1. 活動実施の経緯

阪南市での活動は 2018 年度から続けており、昨年度の活動より「阪南市の産業振興と魅力発信」をテーマとしている。阪南市は、観光資源は豊富にあるが、その良さが PR しきれていないという現状認識があり、2 年前に立ち上げた阪南美食ブランド「KUU 食う」および阪南ガストロノミーツーリズムの展開を目指している。活かされていない魅力の PR を学生の視点で取り組むという趣旨での活動となる。

2. 活動の内容

学生視点で阪南市の魅力を掘り起こし、その魅力を多くの人に発信する活動を行なった。

- ①受入側を交えてのミーティング、学生同士のミーティング
- ②阪南市の魅力を知るためのまち歩き
- ③匠の ippin、やぐらパレードの見学
- ④はんなん産業フェアへの参加、アンケート調査、等
- ⑤SNS での宣伝活動、ショート動画の作成、等
- ⑥はんなん TV 出演
- ⑦牡蠣フェス、葛城修験 50 周年イベントへの参加
- ⑧情報発信活動のための現地取材、等

3. 活動を通じて

これまで数年間続いたコロナ禍の影響からほぼ脱し、イベント参加等の現地での活動機会を充実させることができた。今年度は阪南市での活動 2 年目となる学生もあり、昨年度から本格的に取り組んでいる SNS (Instagram、TikTok) を用いての PR 活動、そしてそのための動画編集など、蓄積されてきた各種ノウハウを活かす取組にも挑戦することができた。そのほか、ローカル TV へ出演する機会なども得られた。情報発信については、フォロワー数の増加といった目に見える成果もあげることができたが、思うようにいかなかった部分について反省したり、文章の内容やハッシュタグの用い方等について工夫したりするなど、実践的活動からしか得ることができない多くの貴重な経験を得られたことが重要である。

これらの経験から学んだ知見や気づきを、座学での学修などにもきちんとフィードバックし、今後の学生生活に活かしてほしい。

4. 成果ポスター

阪南市LPP2024年度活動報告

叶彩乃 中野真緒 飯島颯太 中山穂香 川上凱 中島千華瑚 端野莉子 三澤孝未

○活動目的

阪南市とは？

阪南市は、大阪府南部の泉州地域に位置する大阪府の中で最も新しい市であり、大阪湾と和泉山脈に囲まれた地域です。月化粧ファクトリーやせんなん里海公園など魅力的な観光スポットが多く存在します。また、豊かな自然を活かした新鮮な野菜や魚介類などの食、阪南市内各地区のやぐらが集まりスピード感あふれる勇壮な曳行が繰り広げられる秋祭りなども魅力となっています。

課題

阪南市の課題は、日本の夕日百選に選ばれた公園や老舗酒造、月化粧ファクトリーなどの観光資源が豊富にあるにもかかわらず、その良さをPRしきれていないことです。そこで実際にまちあるきに行ったイベントに参加したりして、魅力を発見する活動を行いました。さらにその様子をSNSで発信することで魅力の多い阪南市の認知拡大を目指しました。

阪南市



○まちあるき

最初の活動として、阪南市をよく知るためのまちあるきを実施しました。

匠のippin

商工会1階の産直市である匠のippinで、阪南市の事業者様が作る特産品を販売する様子を見学させていただきました。

苔っこ

様々な苔や石、砂を使った個性的な苔テラリウム作りを体験させていただきました。

浪花酒造

歴史ある酒造を見学させていただき、伝統的な日本酒の作り方などを説明していただきました。

せんなん里海公園

目の前に広がる大阪湾と美しい夕日を見ることができました。

月化粧ファクトリー

大阪銘菓である月化粧が作られる様子を見学し、その歴史についても学びました。

○地域でのイベント

阪南産業フェア



阪南市商工会が開催する地域活性化事業への参加として11月3日(日)に「はんなん産業フェア」で事業者様のブースをお手伝いさせていただきました。対面販売の体験を通してイベントに訪れた地域の方々や事業者の方々と交流することができました。

さらに、阪南市の産直市である「匠のippin」で販売されている商品を紹介するポップを制作させていただきました。

牡蠣フェス & 葛城修験日本遺産認定5周年イベント

1月11日(土)には「牡蠣フェス」「葛城修験日本遺産認定5周年イベント」のお手伝いをさせていただきました。阪南市は大阪府で初めて牡蠣の養殖に成功した市であり、和歌山県、奈良県、大阪府の19市町村にまたがる葛城修験の石碑がある市でもあります。今回のイベントはそれらの魅力を来場者の方々にお伝えするためのものでした。

私たちはアンケートの回収に取り組んだほか、出店ブースの撮影や体験なども行いました。



○SNS発信 & 動画制作

InstagramやTikTokに、まちあるきで訪れたスポットや学生たちの活動の様子を紹介する動画などを投稿しました。SNSを通じて阪南市の魅力を一人でも多くの方に伝えたいという想いを込め、投稿ごとに役割分担を行いながら、動画制作や文章の考案をそれぞれが担当しました。



HANNAN_CITY_LPP



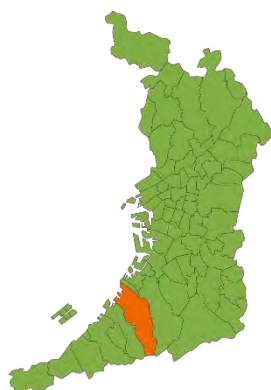
和歌山大学阪南市LPP

○活動を振り返って

阪南市LPPは2年間の活動で、まちあるきやイベントへの参加、SNS投稿などを通じて阪南市の魅力を発信してきました。特にショート動画に関しては、より多くの方に届けるために構成や拡散方法にたくさん工夫を凝らしました。ここまで活動できたのは阪南市の市役所や商工会の方々、事業者の方々、そして応援してくださった皆様のおかげです。本当にありがとうございました。

大阪府岸和田市

古民家活用を通して地域課題の解決策を考え、実践する。



【活動の基本情報】

参加学生数:8 名

(1 年生:2 名、2 年生:5 名、4 年生:1 名)

活動期間:2023 年 5 月～2025 年 1 月

担当教員:竹林浩志

1. 活動実施の経緯

前年度、岸和田市内畑町にある古民家の活用方法を考えるため、学生の発案により、地域の方々へのヒアリングが行われ、学生のアイデアによる古民家でのイベントも実施してきた。地域住民の方々へのヒアリングと主体的なイベント開催経験を踏まえて、今年度も内畑地域の魅力創出・情報発信をすることを目指して活動することになった。また、岸和田市山手を中心に古民家の活用から人のつながりや地域の賑わいを作れないかと考えている 20 代～50 代のメンバー(建築士、大工、古民家カフェ経営者、NPO 法人、行政職員、市民)の活動にも関わることも想定して活動を始めた。

2. 活動の内容

今年度は山手地区の古民家活用を中心に魅力創出・情報発信に取り組んだ。

また、図書館職員の方や岸和田古民家 Base(KKB)とも連携・協力して合同会議を行い、意見交換を行うなどして、実際に取り組みを行っている人たちと意見交換をして、実際に当該地域でのイベントを実施することや、地域の方向けのワークショップを開催するなどの地域の魅力創出活動などの様々な活動を行った。

3. 活動を通じて

色々な立場の様々な考えの方と実際に出会い、コミュニケーションをとることによって、地域での活動の実際、およびその難しさと楽しさと地域活動の重要さが以前より、より深く理解できたと考えられる。授業期間に活動することが多く、和歌山大学から現地まで若干の距離があるため、活動回数を増やすことが難しかったが、参加学生たちは個々に知見を増やし今後の様々な諸活動に活かしてくれるものと考えている。

4. 成果ポスター

岸和田LPP

和歌山大学観光学部

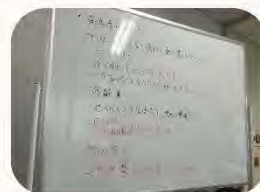
27151123 山崎莉奈 T2310015 掛江菜月
T2310034 佐橋亮 T2310043 大工千佳
T2310056 常吉大悟 T2310089 増井隆乃輔
T2410007 稲田絢 T2410030 國田知里

概要

今年度は岸和田市の山手地区の古民家活用を通じて魅力創出、情報発信に取り組んだ。
空き家対策を目的とした岸和田古眠家Base (KKB) とも協力、11月にはイベントを実施し、当該地区住民への自分たちの地域の魅力の再認識を促した。情報発信に関してはSNSに力を入れ、活動の輪を広げるためにイベント前の告知等をInstagramにおいて行った。

普段の活動

11月のイベント開催に向けて、学生主体の会議をおこなった。また、図書館職員の方やKKBの方など巻き込んだ合同会議にも参加することで、直接地域の方との意見交流の機会をつくることができた。そこで得られた意見をもとにして、イベントに必要なものは何か、またどのようにしてイベントを成功させるか話し合った。そのほか、現地活動を取り入れた。地域の実態や必要としているものを知るきっかけができた。



イベントの内容

11月9日に山直上(やまだいかみ) 地区でスタンプラリーを開催した。井坂酒造、積川神社、猿とモルターレ、田舎育ち本舗、大工さんの倉庫をチェックポイントに設定した。地域の方と竹笛のワークショップや施設見学を通して交流することができた。イベントには約20名が参加した。参加者アンケートを実施しどういった方が参加しているのか知ることができた。



今後について

本LPPは今年度もち一端の区切りとなる。しかし中止となった古民家移住体験イベントが今年3月に開催される予定である。実際に参加しイベントで得られた力を生かして運営に参画していく。



LPPのInstagram



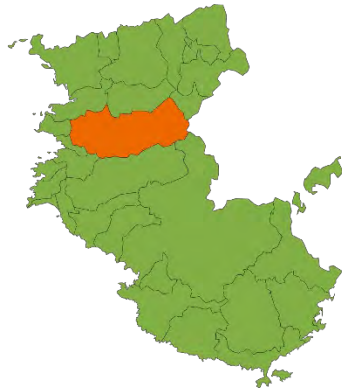
KISHIWADA_KOMINKA_LPP

2024年度和歌山大学観光学部LPP合同報告会



和歌山県有田郡有田川町

学生との協働による棚田保全・集落支援活動



【活動の基本情報】

参加学生数: 6 名

(1 年生: 1 名、2 年生: 6 名)

活動期間: 2011 年 7 月～

担当教員: 大浦由美

1. 活動実施の経緯

有田川町での第 19 回全国棚田(千枚田)サミット(2013 年度)開催決定をきっかけに、2010 年に県が企画した「棚田モニターツアー」に当時の観光学部生約 20 名が参加した。地域の農業者の高齢化とともに耕作放棄地が増加する当地の現状を目の当たりにして、学生側から「棚田保全ボランティア」のアイデアが出されたことをきっかけに、学内で棚田保全ボランティアへの参加者を募り、「棚田ふあむ」を結成。2011 年 7 月から活動を開始した。

2. 活動の内容

例年と同様に、田植え(5 月 26 日)、山椒収穫支援(7 月 13 日～15 日)、稲刈り(9 月 29 日)、草刈り(11 月 17 日)等の農作業支援を中心に、秋祭り支援(10 月 12 日～13 日)、地元交流会(12 月 22 日)、天神祭支援(1 月 19 日)などの集落活動支援や交流活動を実施した。また、活動報告誌「ふあむからあのね」の作成を再開し、沼地区住民に配布することができた。

3. 活動を通じて

今年度は、初回の田植えの際にミニ交流会を開催したことで、参加学生と地元農家とのコミュニケーションがスムーズになり、以降の活動にも良い影響がみられた。また、しばらく途絶えていた宿泊を伴う活動も再開することができた。現地で交流する機会が増えたことで、農作業支援を行うだけでなく、地域での暮らしの現状や、農業への思いを知り、今後の活動の方向性についてより深く考えることに繋がっていることが、参加学生のレポートから読み取れた。

次年度は、地元交流会でのワークショップの際に地域住民から出された「郷土料理」の継承に関する活動など、新たな活動にも挑戦したい。

4. 成果ポスター

有田川町LPP

棚田ふぁむ

私たち有田川町LPPは、地域の方々と学生との協働によって、棚田の保全及びその基盤となる集落の活性化に向けた取り組みを継続的に支援することを目的として活動しています。有田川町沼地区の棚田は、棚田の枚数や面積が有田川町のなかでも随一の規模を誇る広大な棚田です。しかしながら、高齢化や人口減少によりその維持が難しくなっています。そこで、当プログラムでは、学生がその棚田の一ヶ所をお借りして、田植えから稲刈り、精米作業までの一連の流れを担い、棚田の景観の維持に貢献しています。それに加え、棚田を支える地域住民の方々の生活や、棚田に根づく文化の継承に対する支援も行っています。



2024年度の活動

5月 **田植え・交流会**
棚田の田植えと交流会を行いました。丁寧に田植えを教えてもらい、豊作を願って田植えを終えました。

7月 **山椒収穫支援**
収穫は地道ですが、達成感のある作業でした。仕分け作業を見学し、多くの労力を要することを実感しました。

9月 **稲刈り支援**
5月に植えた稲の収穫を行いました。米作の一連の流れを経験し、お米を作ることの大変さを実感しました。

10月 **秋祭り支援**
一泊二日で餅上げや祭り当日の準備など、秋祭りの支援を行いました。その合間には精米作業も行いました。

11月 **草刈り・獣害柵の点検**
棚田の草刈りと、獣害柵の点検を行いました。今後の棚田の維持のため、地域の方々と共に頑張りました。

12月 **交流会**
1年間の活動の振り返りやこれからの沼地区の在り方について話し合いました。食事もを行い、交流を深めました。

1月 **天神祭支援**
餅上げ等の天神祭の支援を行いました。その後は交流会を行い、親睦を深めました。

●今年度の総括

今年度は、高齢化や人口減少により、支援の重要性が高まっていることを実感した年でした。このような状況下で、昨年度よりも活動日数が増加し、地域の方々のお力になったことは今年度の成果の一つです。また、今年度はコロナ以降休刊していた地域住民向けの活動報告誌である「ふぁむからあのね」を復刊しました。これにより、毎日の活動には欠かせない地域住民の方々にも活動内容を知ってもらうとともに、学生と地域の方々の信頼関係を構築できたことも成果の一つです。

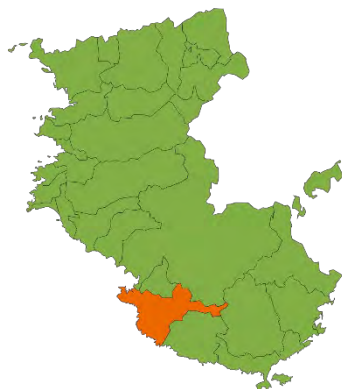
●来年度に向けて

12月にワークショップを行った際に、地域の食文化を学びたいという意見があったため、それに関するイベントを開催することを検討しています。また来年度は、地域外への広報活動にも力を入れていきたいと考えています。

和歌山県西牟婁郡白浜町

白良浜海水浴場における集客力アップ及び

顧客ニーズにあったサービスの企画開発



【活動の基本情報】

参加学生数:18 名

(1 年生:6 名、2 年生:10 名、3 年生:2 名)

活動期間:2023 年 6 月～2025 年 1 月

担当教員:佐野楓

1. 活動実施の経緯

南紀白浜観光協会が実施している夏期白良浜海水浴場での取り組み事業として、顧客満足度やお客様の利便性を向上させるために、パラソル等の貸出や飲食物の販売事業を行っている。その中で、南紀白浜観光協会と連携し、海水浴場に来た顧客の潜在的なニーズに基づき、商品開発に挑んだ。参加学生が白良浜海水浴場にて顧客と対面して販売貸出事業体験をし、かつ白浜町内の海水浴場での対面アンケート調査を実施して現状の事業について調査・分析を行い、顧客ニーズにあったサービスを提供できる事業設計を展開することを目的として活動した。

2. 活動の内容

白良浜海水浴場にて顧客と対面して販売貸出事業体験をし、かつ白良浜海水浴場での対面アンケート調査を実施して現状の事業について調査・分析を行った。現地実習前はアンケートの内容の調整など現地実習に向けてのミーティングを行った。また、去年のアンケートの結果をもとに観光協会の方と話し合いながら商品開発を行った。

3. 活動を通じて

観光協会の方との連絡や計画、目標の設定などをたて、活動の方針などは観光協会の方と話したことをもとに中心メンバーで話し合って決めた。ただ、計画は都度変更したりはしていたものの、一年を通して計画通りに進まない年となった。商品開発も当初たてていた計画通りに商品開発を行うことができなかった。ミーティングでスムージーをつくることは決まっていたが、実際に商品開発に取り掛かるのが予定より大幅に遅れてしまった。そのため、満足に手間をかけることができないまま販売となってしまった。スケジュールがタイトになってしまった影響で商品開発そのものだけでなく、商品のアピールなども満足にできなかった。ただ、ところどころ空白期間ができたりすることもあり、時期によって仕事量の差が大きくなってしまったため、その空白期間にもっとできることを探すべきだった。現地実習に関しても、地震の影響が大きく白良浜に訪れている観光客がかなり少なかった。そのため、アンケートの集計にも影響がでてしまった。このように、想定外の事態や計画通りに進まないことが多く、あまり満足できる活動にはならなかった。

4. 成果ポスター

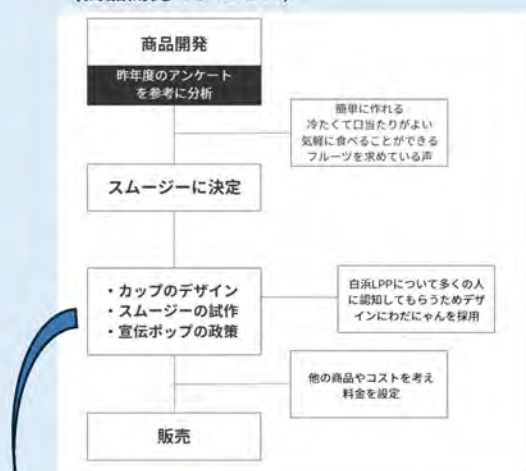
2024年度白浜町LPP

ー2024 Shirahama Town LPPー

〈はじめに〉

私たち白浜町LPPは昨年のアンケート収集の結果をもとに観光客の傾向やニーズをまとめ、本年度は白浜観光協会様の出店する露店での商品開発に挑戦しました。また、昨年度制作したニーズ調査のアンケートの内容改善も行いました。

〈商品開発のプロセス〉



〈アンケート内容の改善〉

昨年度の反省を活かし、気軽に答えられるように質問項目を減らす、個人的な質問（職業等の質問）を失くす、今年度の商品開発のフィードバックとなるような質問を取り入れるなどをして、アンケートを改善しました。

〈現地実習〉

今年度も南紀白浜海水浴場で3グループに分けて現地実習を行わせていただきました。私たちが開発を行ったスムージーの販売と、昨年度に引き続き海水浴客のニーズを調査するためのアンケートを同時進行で行いました。しかしながら、最初のグループが実習に向かう直前に「南海トラフ地震臨時情報（巨大地震注意）」が発表されたことにより繁忙期に白良浜が閉鎖となってしまったため、私たちが実習に行った際の海水浴客は前年に比べかなり減少していました。しかし、昨年同様海水浴客と直接会話をすることでより詳しい情報や求めているものを理解できたと考えています。



〈反省点と今後〉

反省点：思うように売り上げを伸ばせなかった



今後の方針と改善点

- ・ポスターや宣伝に力を入れる
- ・チーム全体のマーケティング知識を向上させる
- ・アンケートの分析を強化
- ・和歌山の特産物を用いる

〈最後に〉

本年度は、メンバーにとって初めとなる「商品開発」を行いました。活動をする中でその奥深さと困難さを実感するとともに、自分たちの課題点を見つけることができました。また、本年度は南海トラフ注意報の影響を受けたことで、改めて海水浴という天候依存型アクティビティの不確実性や不安定さを実感するすることができました。

昨年とは異なる視点でこのLPPでの活動に取り組むことができた



和歌山県和歌山市

雑賀崎の地域資源の情報発信と空き家の利活用



【活動の基本情報】

参加学生数:10名

(1年生:2名、2年生:4名、3年生:4名)

活動期間:2022年4月～

顧問:永瀬節治

1. 活動実施の経緯

私たちは、2019年度に観光まちづくりコンテスト参加のため発足した雑賀崎での活動を、より実践的に行うため2022年度からLPPとして活動している。昨年度は地域住民の方々や地域団体と協力して、イベントの実施や空き家対策に向けての活動を行ってきた。

2. 活動の内容

今年度の雑賀崎 LPP では、雑賀崎に住んでいる方・雑賀崎に訪れる方(観光客)に雑賀崎をより知ってもらい、好きになってもらうため、子供向けのイベント、ロゲイニング、SNS での発信などの取り組みを行った。

2024年2月に雑賀崎で活動するNPO法人さいかざきポッセが主催する「enjoy!旧正月 in 雑賀崎」のイベントのなかで、子供たち向けに凧作りワークショップを企画、運営し、同年8月に同団体主催で開催された「盆踊り」では、祭りの雰囲気盛り上げるため、お面やでんでんたいご作りのワークショップを子供たち向けに実施した。

また、自分たちを含めた若い世代に、より雑賀崎を身近に感じてもらうため、コンパスと地図を持ち、制限時間内に指定されたチェックポイントを回り、いかに多くの得点を獲得するかを競う競技「ロゲイニング」を実施し、雑賀崎 LPP 以外の本学部学生の参加を募った他、和歌山市の住民や出身者などを繋げるコミュニケーションサービス「FAVTOWN」と連携し、雑賀崎 LPP の活動や雑賀崎の魅力・課題の発信を行った。

3. 活動を通じて

今年度の活動を通じて、自分たちがこれまで気づけなかった雑賀崎の魅力や課題を新たに発見しただけでなく、今後自分たちがどのように雑賀崎に貢献していく必要があるのかを議論する機会にもなった。今年度にあまり取り組めなかった空き家の利活用、コミュニティの活性化等の活動も含め、次年度は雑賀崎の現状を踏まえつつ、新たに自分たちにしかできないことを見つけ活動していきたい。

4. 成果ポスター

和歌山市雑賀崎LPP



雑賀崎の地域資源の情報発信と空き家の利活用

雑賀崎は和歌山市の南西部に位置する漁業が盛んな地域である。
雑賀崎LPPは2022年度より発足し、NPO法人である「さいかぎきポッセ」や雑賀崎に住む方々のご協力のもと、これまで活動を行ってきた。2024年度は3回生4人、2回生4人、1回生2人で活動を行った。

【活動内容】

イベントのお手伝い



2月「enjoy!旧正月in雑賀崎」にて凧作り



8月「盆踊り」にてお面・でんでんだいこ作り

FAVTOWN



「FAVTOWN」と連携した
LPPの活動や雑賀崎の魅力・課題の発信



ロゲイニング

雑賀崎の迷路のような街並みをより多くの人に楽しんでもらうため、コンパスと地図だけでチェックポイントを回り得点を競う競技「ロゲイニング」を2回実施



宣伝方法や地域との関わり方などの課題はあったが、参加者だけでなくLPPのメンバーも楽しみながら雑賀崎の魅力を再発見できた。

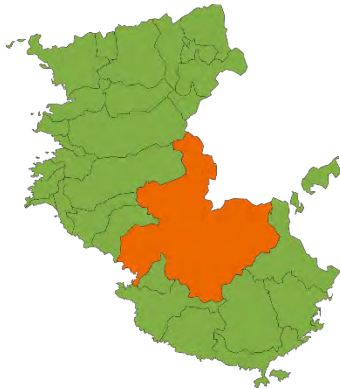
【今後の展望】

今年度はロゲイニングなど、学生が主体となって活動する機会を増やすことができた。
一方で、空き家に関する活動ができなかったことなど、学生主体で活動することの難しさと地域の人との継続的な交流の大切さを痛感した一年だった。
来年度は飲食店・観光マップの作成や、空き家の利活用に関する活動などを進めていきたい。



和歌山県田辺市龍神村

地域塾による龍神村の資源を活かした山村活性化



【活動の基本情報】

参加学生数: 6 名

(2 年生: 4 名、4 年生: 2 名)

活動期間: 2024 年 10 月～

顧問: 大浦由美、佐々木啓

1. 活動実施の経緯

昨年度までの 3 年間、林業 LPP として『「林業×地域」の再発見による地域将来ビジョン策定とシナリオプランニング』というテーマのもと活動を行ってきた。3 年間の活動から、将来に向けた取り組みの具体案として「地域塾」構想を提案、その構想を実現することを目的とし、活動を実施する運びとなった。

2. 活動の内容

今年度は受入団体である龍の里づくり委員会や地域の様々な関係者との関係構築、来年度の地域塾の実施を目標にした現状の取り組みに関する調査の実施を目標に活動を行った。今年度の活動で特に成果が得られたのは龍神村地域にて毎年開催されている翔龍祭への参加である。龍神行政局や龍神村森林組合の方々の協力のもと、「組んで楽しむ 木育ジャングルジム」のワークショップのボランティアスタッフとして関わることができた。

3. 活動を通じて

翔龍祭の参加を通して、昨年度までの活動では接点のなかった林業従事者の方や住民の方々と交流を深めることができた。会話の中で住民が実感している人口減少などの課題や龍神へ移住してきた人たちの関わりについて聞くことができた。また龍神分校の先生方にも LPP の活動や地域塾構想について知ってもらう機会となり、来年度の実施を目標としている地域塾の想定している参加者にもアプローチすることができた。昨年度までの活動では、翔龍祭のような多様な地域住民と関わり龍神村地域を広く捉える機会があまりなかったので、次年度以降も参加していきたい。

今年度の活動の反省点としては、予定していた龍神中学校や南部高校龍神分校等の教員や生徒を対象としたヒアリング調査が実施できなかったことである。調査については来年度の活動開始に合わせ、可能な限り早期実施できるよう計画を進めたい。来年度の活動では夏～秋頃に実際に地域塾を実現できるよう、現地調査や講師となる地元関係者への呼びかけを積極的に行っていきたい。

4. 成果ポスター

2024年度 龍神LPP

地域塾による龍神村の資源を活かした山村活性化

岩田・鈴木・長野・宮下・岡田・落合



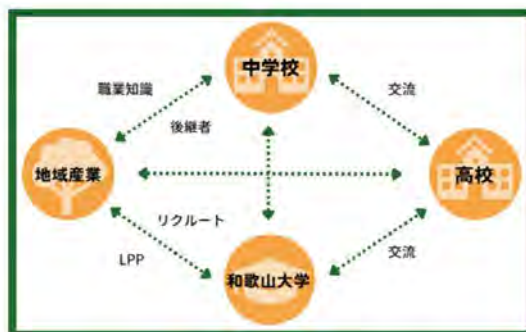
3年間龍神村で行ってきたLPP（しぜみ）の活動は昨年度をもって、一区切りがつけました。プラン策定がゴールだった3年間で先輩たちから引き継いだ「地域塾構想」を実現したいという想いから今年度新たにL活として再始動することになりました。
L活の立ち上げにあたっては新たに龍神村の中で受入団体となってくれる地域の方々を見つける必要があります。私たちの考えている地域塾構想をお話させていただいた結果、村内各種団体の代表や30～40歳代中心の若手メンバーで構成される龍の星づくり委員会の皆さんが受入団体を引き受けてくださることになりました。

01. 昨年度までの活動

田辺市龍神村は古くから林業が盛んな地域であり地域の主要産業の一つとなっています。そのような地域に親着している産業を知るために私たちはまず森林組合や木材市場を訪問し林業の生産から販売の現場を見学しました。さらに、半農半林の生活を営む方に龍神での暮らしについてお聞きしたり、実際にチェーンソーを使って簡易体験を行ったりすることで龍神の暮らしの一部を体感しました。また、龍神中学校で中学生にヒアリングを行い、龍神で暮らす子供たちの林業や地域への意識を調査しました。
3年間の活動により森林が地域にもたらす恩恵を発見すると同時に、後継者不足や被害などの林業を取り巻く問題も明らかになりました。私たちはこれらの問題を解決するには地域愛と相互理解を深めることが重要だと考え「地域塾構想」を地域の方々に提案させていただきました。

02. 地域塾構想とは？

地元の中学・高校と地域産業（林業）、和歌山大学が連携し、大人が地域の子どもたちに職業知識を教えるだけでなく、子供たちが大人に新たな視点やアイデアを与える「学び合い」の交流の場を地域に提案するとともに、龍神にとつての最適モデルを提案し、実施することを目指します。この取り組みを通して、龍神の豊富な森林資源や森林空間自体を子どもたちの教育の場として活用しながら、地域産業を学ぶ機会を創出することで将来的な地域への回帰や地域に対する誇りと愛着の醸成を目的としています。
私たちは、林業を通じた「学び合いの場」で、子どもたちにふるさとのことをもっと好きになってもらうきっかけを作りたいと考えています。



03. 翔龍祭への参加

2024年11月23・24日に開催された翔龍祭に運営側として参加させて頂きました。「わがらの山のくらし」をテーマに、森林資源と触れ合うことができるお店やワークショップが立ち並びました。私たちは、組んで楽しむ木育ジャングルジムのコーナーで、参加者の子どものお手伝いをする形で関わらせて頂きました。最初はスタッフや保護者の方の手を借りて杭を打っていた子どもたちが、どんだんのめり込んでいく姿を見てやりがいを感じました。また、チェーンソーアートの実演や製材所ツアーにて見学させていただき、森林が龍神村の重要な資源であることを改めて実感するとともに、森林が地域の発展を支える偉大な力を有していることを認識しました。地域の皆さんともたくさん交流ができ、とても意義のある2日間となりました。ご協力くださった皆様、ありがとうございました。



\ Follow Us! /

04. 地域塾の実現に向けた今後の展望

地域塾の実現に向け、まずは龍神で行われている林業体験学習や地域教育の現状調査・ヒアリングを行う予定です。また、龍神地域だけでなく田辺市などの高校にも対象を広げて「参加したい」と思ってもらえるプログラム作りを目指しています。来年度の実施を目指し龍神地域の皆さんと話し合いながら、「次世代に残したい産業や地域の姿とは何か」深堀していきたいです。
新メンバーの募集や取り組みに共感して下さる地域の方を呼び込めるようにInstagramを開設しました！活動の様子や地域塾構想について、今後も発信していくのでフォローといねをお願いします。



@RYUJINLPP_WAKAYAMA

3. 2024 年度 LPP 参加学生交流会の実施

LPP に関する 5 つのテーマについて、グループディスカッションを行った。各テーマにはファシリテーター(リーダーを務める学生が担当)が付き、参加学生 4～7 名のグループに分かれて 7 分間の意見交換を行った。1 つのテーマでの意見交換が終われば次のテーマへ移動することで、全員が 5 つのテーマについて意見交換をした。なお、グループは事前に組分けし、複数の LPP プログラムから数名ずつが混合した構成とした。ファシリテーターを中心に、学生の意見を付箋に書き出し、模造紙に貼付することで意見交換の活性化を目指した。

開催日時:2024 年 10 月 21 日(月)、22 日(火) 両日とも 16 時 40 分～18 時頃
会 場:和歌山大学 西 4 号館 T-101 教室、
参加者数:21 日(月)学生 79 名、22 日(火)学生 34 名

■当日のディスカッションテーマ

1. 地域や学生、学生同士、担当教員とのコミュニケーション、連絡の取り方について
2. この半年間を振り返って自分ができたこと、できなかったこと、残りの半年間で頑張りたいことについて
3. 学生のモチベーションについて
4. LPP の活動が授業に活かされている、または、授業が LPP の活動に活かされていると感じるのはどんな時ですか
5. 全員ある程度平等に活動するためにはどうするべきだと思いますか

地域連携プログラム（LPP）での学びの共有と発展を目的としたLPP参加学生の交流会を開催します。
交流会では、LPPに関する5つのテーマについてグループディスカッションを行います。
2024年度の折り返し、この半年間までの活動の振り返りや、今後の活動、地域との関わりについて、
プログラムの垣根を越えて考えてみませんか？

和歌山大学観光学部 地域連携プログラム LPP参加学生交流会 2024



日時：2024年10月21日（月）、22日（火）
いずれも16時40分～18時（予定）
＊16時30分～受付開始

会場：西4号館 T101教室

- 「LPP 参加学生交流会」は、原則、全員参加です。
LPP参加学生の皆さんは、いずれかの日程に必ずご参加ください。
・9月27日（金）23:59までに、右記QRコードから出席可能な日程を
選択してください。
授業との重複などにより欠席する場合も必ず回答してください。
- Lゼミ参加学生（1～3年生）は、本会への参加時間をLPPの単位認定時間
として算入してください。



お問い合わせ先：
和歌山大学観光学部 観光実践教育サポートオフィス（西4号館 2階 K216室）
TEL 073-457-8553 E-mail t-local@ml.wakayama-u.ac.jp



4. 2024 年度合同活動報告会の実施

2024 年度に実施した LPP の活動報告について、その取り組みを広く共有し、学生が活動を振り返り、自身の学びと今後の活動のブラッシュアップを図るため、「2024 年度 LPP 合同活動報告会」を実施した。本報告会は、各プログラムのリーダーを務める学生が中心となり、企画、運営をした。当日のプログラムについては次頁を参照のこと。

開催日時:2025 年 1 月 30 日(木)、31 日(金) 両日とも 16 時 30 分～18 時 15 分頃
会 場:和歌山大学 西 4 号館 T-101 教室、2F 多目的スペース
主 催:和歌山大学 観光学部
来場者数:30 日(木)学生 79 名、教職員 10 名、一般 11 名
31 日(金)学生 73 名、教職員 9 名、一般 12 名

1)発表について

各プログラムが作成したポスター*(一部のプログラムでは追加資料として動画やグラフ等)をスクリーンまたはモニターに掲示しながら、参加学生による 5 分間の活動報告の後、3 分間の質疑応答を行った。参加者および学生からの発表内容に対する意見や感想は、報告後の質疑応答タイム及び交流会で行った。また、Microsoft フォームズを併用し、ご意見、ご質問の収集にあたった。回収したご意見等は、各プログラムのリーダーに共有した。

*発表の際使用したポスターについては、各プログラムの活動報告(本誌 P.12～P.47)を参照のこと。



2024年度

LPP合同活動報告会



和歌山大学観光学部の「地域実践型教育プログラム」

2024年度に実施した全17プログラムの参加学生が一同に会し、活動報告を行います。

学内だけでなく、受入自治体など学外関係者の皆様のご参加を歓迎いたします。

LPPを通じた貴重な交流の機会です。皆様のご来場をお待ちしております。

2025年

1月30日（木） 16時30分～18時30分
31日（金） （予定）

和歌山大学 西4号館（和歌山市栄谷930番地）

T-101教室、1F エントランスホール、2F 多目的スペース

LPP（地域連携プログラム）とは

地域活性化に関心を持つ学生が、現地に足を運び、地域住民と連携して地域が抱える課題の解決を目指すプログラムです。

地域住民は生活者の視点から、学生は「ヨソ者」の視点から意見を出し合い、ともに活動を行うことで、双方にとって新たな気づきの機会となることがLPPの特徴です。

※ 2022年度より、「地域インターンシップ・プログラム（Local Internship Program, LIP）」から名称を変更し、新たな枠組みでスタートしました。

主催：和歌山大学観光学部

お問い合わせ先：

和歌山大学 観光学部 観光実践教育サポートオフィス

〒640-8510 和歌山市栄谷930

TEL/FAX 073-457-8553/073-457-8586 E-mail tourism-er@ml.wakayama-u.ac.jp

2024年度LPP合同報告会 プログラム

2025年1月30日（木）～31日（金）16時30分～18時35分頃

■受付

16:30～16:45 受付（2F 多目的スペース）

■2024年度 LPP合同報告会

16:45～17:00 開会あいさつ・主旨説明（T101教室）

17:00～17:50 LPP活動報告（ポスター発表 報告時間：8分、転換：2分）
発表場所
A：T-101教室 B：2F 多目的スペース

1月30日（木）		1月31日（金）	
A	B	A	B
17:00～17:08 美浜町 美浜町の資源を活かした 観光誘客	那智勝浦町 中山間地域における 地域ハブの役割と 可能性を考える	有田川町 学生との協働による 棚田保全・集落支援活動	白浜町 白良浜海水浴場 における集客力アップ及び 顧客ニーズにあった サービスの企画開発
17:10～17:18 広川町 和歌山県広川町の 地場農産物を活用した 新商品の開発	新宮市 新宮市を訪れる 観光客のニーズ調査・ 分析及びコンテンツ 発掘・発信	有田市（箕島） 多世代で取り組む まちづくり	岸和田市 古民家活用を通して 地域課題の解決策を考え、 実践する。
17:20～17:28 湯浅町 湯浅の若者と共に つくる！本気の商品開発	熊野三山 世界遺産登録20周年 イベント 世界遺産「紀伊山地の 霊場と参詣道」を学び、 熊野を盛り上げよう。	有田市（宮原） 青みかん（摘果みかん） の価値を上げる	海南市 大崎地区の歴史と現状を 体験的に調べ、暮らしを 持続的なものとするため のステップを議論する
17:30～17:38 田辺市龍神村（L活） 地域塾による龍神村の 資源を活かした 山村活性化	大阪府阪南市 阪南市の産業振興と 魅力発信	紀の川市 紀の川フルーツを 活かした商品開発	紀美野町 地区×学生による 観光・文化・交流情報 発信と棚田の再生
17:40～17:48 和歌山市（雑賀崎／L活） 雑賀崎の地域資源の 情報発信と 空き家の利活用			
17:50～18:10	交流会（各LPPブース）		
18:15～18:25	講評（T101教室）		
18:25～18:30	閉会あいさつ（T101教室）		

- ・ご来場の際はまず受付（2F 多目的スペース）にお越しください。
- ・活動報告は各ブースにて行います。ご自由に移動してください。
- ・エントランスホールおよび多目的スペースでは、各プログラムの成果物や活動地域の特産品、パンフレットを
展示しておりますのでぜひご覧ください。
- ・報告後、交流会の実施を予定しております。皆様の積極的なご参加をお待ちしております。

2)発表の実施報告

本会では、各報告時間に2プログラムずつ、別のエリアで発表を行った。当日の振り返りと報告のため、後日、各プログラムの発表の様子や、アンケートフォームで回収したご意見・ご質問に対する回答をまとめた報告書を参加学生が作成した。

和歌山県紀の川市

テーマ:紀の川市の新商品開発プロジェクト

●報告について

紀の川市 LPP は紀の川市の食材を使った新商品を開発しようという目標のもと 2 つの班に分かれ、実現に向け取り組んだ活動の内容について報告した。アフタヌーンティー開発班はすでに商品開発を終えていたため、そこに至るまでの経緯や商品を作るうえでのコンセプトについて説明した。一方、発酵ドレッシング開発班は、現在も商品開発の最中であるため現在までの報告と今後の活動予定について報告した。最後にまとめとしてこの活動を通して学んだこと、得た知見について述べた。質問の時間には、「自分らしさをどのような場面で活かすことができたか」という質問に対して、各々が自分の考えを伝えた。1 回生のための LPP であったがそれぞれが役割を考え、行動できた報告会であったと思う。

パネル展示の時間には、地域住民の方や行政の方が質問にいらしてくださり、自分たちの成果について説明する機会ができたことでより活動のやりがいを実感することができた。

和歌山県海南市

テーマ:大崎地区の歴史と現状を体験的に調べ、暮らしを継続的なものとするためのステップを議論する

●報告について

報告会では、一年間活動を行ってきたことのまとめなどを中心に話した。ただ、まとめを話すだけでなく、私たち LPP メンバーが抱く大崎に対する思いを含めて、お話をできたことがとても良かった。また、昨年度から制作を続けてきた大崎ガイドブックをこの場を借りて初めて披露させていただき、多くの人に手に取ってもらうことができた。

この発表を通して、改めて自分たちの大崎にある魅力や価値を再認識できたとし、多くの方にその魅力を少しでも感じ取ってもらえたのではないかと考える。そして交流会では、ガイドブックや大学祭での模擬店出店について興味を持っていただいた方が多く、より詳しい内容をお話するなど、メンバー全員で交流を深め、よい話し合いをすることができた。

●質疑応答

Q.ガイドブックは今後どのような形で配布していくのか。

A.メインとしては大崎の方々(住民の方)に配布することであるが、観光学部棟の配布物コーナーに何部か置かせていただき、外部の人にも手に取ってもらえるような形にする。

Q.インスタを開設したと話していたが、具体的にどのような運用を行っているのか。 A.昨年の夏ごろに開設したばかりなので、それほどフォロワーは多くありませんが、自分たちの活動や思い出を中心に投稿している。今後もたくさん情報を発信していくつもりであるのでぜひ多くの方に見ていただきたいし、フォロワー増加に向けた取り組みを行いたい。

和歌山県海草郡紀美野町

テーマ:地区×学生による観光・文化・交流情報発信と棚田の再生
●報告について 報告では2024年度に本LPPで行った活動と来年度の活動目標を中心に発表した。発表では一つの活動に注力するのではなく、地域貢献と自分たちの学びを目標とした様々な活動に取り組んできたという本LPPの特色を伝えることができたと思う。 ●質疑応答 Q.来年度の活動目標はどのように実現していく予定か。 A.本LPPでは「地域資源を活動した教育観光の推進」「学びと現地活動の相互関係強化」を来年度の目標として設定していた。ただ、実際にどのようにその目標を達成するかについてはまだ話し合いの途中であったため、現状としては検討段階であると回答した。来年度メンバーを中心に具体的な方法を決定させていく予定である。

和歌山県有田市箕島

テーマ:多世代で取り組むまちづくり
●報告について 報告では、今年度の活動であるスマホ講座、あそぼうさいについて話した。また、ワークショップに関しての報告は開催途中であったため第一回のみ説明となった。今年度はICT講習、防災イベント、ワークショップとテーマを絞った活動ではなく様々な活動を行った。各活動の詳細についての報告を通じて好意的な意見を頂けただけでなく、地域の活動団体に興味を持った学生もいたようだった。 ●質疑応答 Q.あそぼうさいにて協働したマモッチャクラブとはどんな団体なのか。 A.防災士の資格を持つ有田市の主婦の方々によって構成された団体であり、去年の活動でも力を貸していただいている。 Q.来年度以降の活動はどうするのか。 A.来年度以降はワークショップを通じテーマを考え直すとお伝えしましたが、防災に注力した活動に変わる予定である。

和歌山県有田市宮原

テーマ:青みかん(摘果みかん)の価値を上げる

●報告について

LPP 最後の年(5年目)となった今年度は今までの活動の総決算として商品化を実現させることを大きな目標に活動に取り組んできた。報告会では商品開発に加え今年度行った、地域のお祭りでの出店や摘果作業の振り返り、2月9日に企画しているイベントについて報告した。報告会・交流会では商品化された青みかんポン酢について質問をいただいた。

●質疑応答

Q.様々な商品がある中でポン酢に着目した経緯

A.栽培情報班が行った青みかんの時期ごとの味や搾汁量の調査結果から、学生メンバーで商品アイデアの検討を行い、青みかんの特徴である酸味や苦みを活かすことができ、かつ実現可能性が高いと考えられた「ポン酢」の商品化を行った。

Q.どのように業者さんとタイアップしたのか。

A.学生メンバーで青みかんを活かせる商品を考え、協力いただけそうな事業者をリストアップした。その後、ポン酢に関しては商工会議所の方の協力を得て企業候補を探し、候補となる企業にはメールを送った。そしてオンラインミーティングでプレゼンテーションを行い、最終的に協力を得ることができた。

Q.商品化に至るまでの経緯とプロセス

A.活動開始当初から青みかんを使用した料理のレシピを考案してきたが「宮原といえば、青みかんといえば、これ!」と思ってもらえるような商品を開発したいという想いからこの活動に取り組んできた。まず、栽培情報班が青みかんの時期ごとの味や搾汁量の変化などを調査し、それをもとに学生メンバーで実現できそうな商品アイデアを検討した。その結果、「ポン酢」と「スイーツ」に絞り、事業者の方にメールで協力を依頼した。その後、企業や地域の方々と連携し、試作や改良を重ねながら商品化を進め、2024年11月に販売を実現することができた。

和歌山県有田郡湯浅町

テーマ:湯浅の若者と共につくる本気の商品開発!

●報告について

報告会では、湯浅町の概要と一年間の活動を発表した。最後には、二年間の活動を振り返り、達成できなかった目標についても触れたが、試行錯誤を重ねながら良い形で活動を終わることができたと感じている。この発表を通じて、湯浅町の魅力や商品開発の難しさ、そして地域の人々との交流の重要性を伝えることができたのではないかなと思う。

また、交流会では湯浅町に興味を持ってくださった方々がポスターの近くに集まり、私たちの活動や湯浅町についてさらに詳しくお話する機会を持つことができた。

●質疑応答

Q.二年間の活動の中で最も印象に残っている活動は何か。

A.最後のイベント。最後のイベントでは、これまでの商品開発の成果を湯浅町の方々に直接伝えることができただけでなく、湯浅町の住民や観光客の方々と接客を通じて交流することができた。とても楽しい時間であり、地域の方々との絆を深める良い機会となったと感じている。

和歌山県有田郡広川町

テーマ:和歌山県広川町の地場農産物を活用した新商品の開発

●報告について

活動報告会には学生5名全員で出席した。今年度からの新規プログラムである広川 LPP は、現地活動3回(うち1回宿泊研修)、通年課題としての商品開発事例の収集など、一年を総じて活動を振り返った後に、1/27 に行った LPP 内部での報告会での内容について話した。最後に、次年度以降の活動で何を意識して取り組んでいくか今後の展望について報告を行った。

広川を知ることにかかり過ぎてしまい、当初の活動計画通りには進められなかったが、最終的には商品案を発表する段階まで進めることができた。来年度は失敗を恐れず、企画した商品を形にしていき、トライ＆エラーの精神でどんどんチャレンジすることを意識していきたい。

●質疑応答

Q.「内部報告会で課題点・改善点について話し合った」その具体的な内容について

A.実際に提案した商品案を簡単に説明したうえで、八朔の季節性や必要コスト・制作方法を今後なるべく早く決定していく必要があるということ。

和歌山県日高郡美浜町

テーマ:美浜町の資源を活かした観光誘客

●報告について

各々の LPP で、様々な活動がされていて興味深かった。人数が多いからといって、活動が円滑に進むとは限らず、反対に人数が少ないからといって様々な活動ができるとは限らず、グループ活動の難しさを改めて感じた。私が所属していた美浜町 LPP では、人数が多く、取りまとめるのが大変で、会議の欠席が多くなると活動意欲が下がり、活動の参加頻度が少なくなる学生が一定数いた。一方で、今回の合同報告会を聞いて、人数が少ないからこそできる活動が限られてしまったり、同様に意欲低下やスケジュール調整により参加できない学生がでてきたりしていたという意見を聞いて今後の課題として改善していかなければ

ならない点だと感じた。良かった点は、イベントや地域活性化といった地域の方と LPP が上手く関わり、地域の課題を楽しく改善できていたところが活動を通じて感じたので、貴重な経験が自分も含めそれぞれのグループでできていたと思う。一年間リーダーとして、メンバーが楽しく活動できる雰囲気作りを意識してやってきたが、他の LPP のリーダーも雰囲気作りに力を入れていると話していたことを踏まえて今回合同発表会でどの LPP も一致団結して楽しそうにしていってこれまでの成果が出ていたと感じた。

和歌山県東牟婁郡那智勝浦町

テーマ:中山間地域における地域ハブ(HUB)の役割と可能性を考える

●報告について

私たちの LPP では、昨年度に引き続き、【中山間地域における地域 HUB の役割と可能性について】というテーマで活動を行った。昨年度は、全国棚田サミットの開催地となり、そのイベントを中心とした活動を行った。今年度はより地域の内部に密着し、【環境共生の会】という、地域の人達の寄り合いの場に参加させて頂くこととなった。そこでは、色川で暮らす人々が【色川の未来】について考え、行動していることが分かり、様々な学びを得ることが出来た。この 2 年間を通し、色川における中山間地域の【HUB】とは、【色川について考え、その思いを共有することが出来る寄り合いの場】ではないかという、テーマの答えを自分たちなりに導き出すことが出来た。昨年度と今年度から得た学びを、報告できちんとお伝えすることが出来たと考えている。また、私たちの報告を拝見し、1 回生の方が興味を持って頂き、報告会の後の交流会にて声をかけていただけた。単なる活動報告ではなく、色川という地域に興味を持っていただくきっかけとなる良い機会になったと考えている。今年度でテーマの区切りがつくので、報告会で得た発見を参考にしつつ、来年度の活動に活かしていきたいと考えている。

●質疑応答

Q. 学生が寄り合いに参加したことで、地域にとってどういった効果があるのか。

A. 私たち学生が寄り合いに参加したことで、話し合いがより円滑に進んだと考えられる。参加した【地域共生の会】の寄り合いでは、プロのファシリテーターの方をお招きし、グループワークの形を取っていくつかのテーマについて意見交換を行っていた。学生は、各グループの書記として、グループ内で出た意見を全体に共有するという役割を担った。地域の方は、学生が客観的に分かりやすく意見をまとめてくれたことで、話し合いが円滑に進んだ、また頼みたい、と言ってくださっていた。また、学生としても、地域特有の限られたコミュニティ内での話し合いの難しさ、新しいことを実行するこの厳しさを学ぶことが出来た。これらは実際の寄り合いの場に参加してみないと分からないことであり、そのような場に参加する機会は貴重なため、来年度も機会があれば参加したいと考えている。

Q.過去に那智勝浦町色川 LPP に参加していた先輩で、色川の方と地ビールを作ったという話があったが、現在はその地ビールはどのようなになっているのか。 A.地ビールを作ったという OB の先輩とは 1 度お会いしたことがあるが、現在その作られた地ビールが色川でどのように扱われているのかは情報を得ることが出来ていないので、確認したい。

和歌山県新宮市

テーマ:新宮市を訪れる観光客のニーズ調査・分析及びコンテンツ発掘・発信
●報告について 新宮市 LPP は、「観光客を対象とした映像コンテンツの発信」と「新宮という観光地のニーズ調査」の2つをメインに活動してきた。一年目の成果を発表するために、ショート動画 2 本を筆頭に、訪問報告や常時活動やニーズ調査、また今年の活動を踏まえて来年どのような活動をしたいのかを中心に報告を行った。特に実際制作した動画を報告会で使用することにより、相手の反応などをリアルに感じ取ることができ、これからの私たちの活動の刺激となった。 ●質疑応答 Q.(新宮市出身の方より)実際に新宮市を訪れてみてどう感じたのか。 A.すごく穏やかで親切的な街、そして世界遺産などの歴史が身近に触れることができ、飲食店などが多く魅力的な街と感じた。最初は距離感があっても、大学の勉強などで訪問していることを知ると、すごく親身に様々なことを教えてくれて活動のサポートになった。

和歌山県新宮市、田辺市、東牟婁郡那智勝浦町

テーマ:世界遺産登録 20 周年プレイベント 世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」を学び、熊野を盛り上げよう。
●報告について 報告会では、今年度の取り組みである「パンフレット制作・デジタルスタンプラリーの実施・公式 Instagram の運営」に加え、その他の広報活動やアンケート・SNS インサイト分析による成果と今後の展望について発表した。 質疑応答では質問は出なかったが、その後の交流会では学生や関係者の方々から労いの言葉や感想をいただいた。また、成果ポスターをじっくりご覧になる方も多く見受けられた。 前年度と比べてメンバーが 10 名以上減少したこともあり、一人ひとりの活動量が増えていたが、その分、熊野三山観光協会の方々や京都産業大学の学生の皆さんとの連帯意識も強まり、メンバー全体のアントレプレナーシップも醸成された 1 年になったと考える。

大阪府阪南市

テーマ：阪南市の産業振興と魅力発信

●報告について

メンバーそれぞれがポスター制作において担当した箇所について発表した。具体的には阪南市とその課題とは、まちあるきや地域のイベントについて、SNS での発信について、活動を振り返ってのまとめなど。阪南市 LPP は今年度で活動が終了するため、2 年間の活動の総括とともに報告を見に来てくださった市役所の方に感謝をお伝えできたことも良かった。昨年はそれぞれのポスター周辺に集まっていたため手狭に感じる場面もあったが、今年は広いスペースを使えたので 8 人での発表も問題なく、発表前後の移動もスムーズだったように感じる。

報告会の後の交流会では、阪南市の隣町である岬町の観光協会の方とお話しさせていただいた。岬町でもイルミネーションなどの取り組みを行っており、SNS をみて訪れる方が多いそうで、特に私たち世代に情報を届けるための SNS の重要性について再認識することができた。

大阪府岸和田市

テーマ：古民家活用を通して地域課題の解決策を考え、実践する。

●報告について

報告会では岸和田市山手地区で行った取り組みを中心に今年度の活動内容について発表した。スタンプラリーイベント当日の竹笛の演奏や参加者アンケートの集計から作成したグラフを使用して現状について整理した。協働先である岸和田市立図書館、岸和田古眠家 Base の方々にもご来場いただき発表を聞いていただくことができた。

●質疑応答

Q.スタンプラリーイベントについて広報はどのように行ったのか。

A.今回のイベントは地域外よりも地域住民に向けて古民家活用を行っているという周知を進め、活動を理解してもらうことを目的としていた。Instagram での情報発信以外では紙媒体としてチラシを作成した。図書館やスタンプラリーのチェックポイントとなった場所に置いてもらったり町から許可を得て回覧板で回してもらったりして地域内で広報活動を進めることができた。

Q.Instagram の活用に関してどのような投稿をしているか。フォロワー数は何人でいつ頃から始めたか。

A.昨年度(2023 年 5 月 21 日)よりアカウントを開設したが、投稿等の運用を開始したのは今年度から。フォロワー数は 101 名(1 月 31 日時点)。投稿内容はスタンプラリーのチェックポイントである場所について紹介し、イベント当日までカウントダウン形式で投稿し

た。ハッシュタグはイベント内容に関連するワードの中から投稿件数が多いものなどを分析し、分析結果をもとに使用するワードを決定した。

和歌山県有田郡有田川町

テーマ: 学生との協働による棚田保全・集落支援活動

●報告について

今年度の活動について振り返った。2024 年5月から 2025 年 1 月までの各活動を紹介し、そこでの成果や学びについてコメントした。発表の終わりには、活動日数の増加と地域住民向けの活動報告誌である「ふぁむからあのね」の復刊が今年度の成果であると総括し、来年度はワークショップにあった意見をもとに、地域の食文化に関する勉強会を開くことや地域外への広報活動に力を入れることを目標とすると締め括った。

●質疑応答

Q. 地域の方々にとって有田川町 LPP のメンバーはどのような役割を担っていると思うか。

A. 日々の活動や「ふぁむからあのね」での感想の共有を通して、獣害対策の疲弊などで失われつつある地域の方々の農業に対する誇りを取り戻すという役割を担っているように思う。また余談ではあるが、地域の方々のなかには、LPP メンバー以外の面識のない地域外の人たちが集落に来ることに対して、あまり前向きでない方がいることが分かった。そのため、今後は地域の方々との合意形成にも注力しなければならないと感じている。

和歌山県西牟婁郡白浜町

テーマ: 白良浜他海水浴場における集客力アップ及び

顧客ニーズにあったサービスの企画開発

●報告について

今年度の活動は先年度の活動に引き続き現地実習を行った。そのため、昨年度のアンケートの調整内容と商品開発の経緯・過程・結果・反省について報告した。また、地震の影響で活動にも影響がでたことも報告した。最後に 1 年間を通しての反省点や学びなどの総括を行った。

●質疑応答

Q. 商品のアピール方法についてどのようなことを行ったか。

A. 商品のカップのデザインにわだにゃんをいれたり、POP をつくったりすることでアピールをした。ただ、SNS などうまく使ったアピールを行うことができなかったことを反省している。

和歌山県和歌山市

テーマ:雑賀崎の地域資源の情報発信と空き家の利活用

●報告について

「雑賀崎の地域資源の情報発信と空き家の利活用」のテーマの下、今年度行った活動内容について発表した。活動内容としては、受け入れ団体であるさいかざきポッセの協力で行った子どもたち向けのイベント、学生が主体となって実施したロゲイニング、FAVTOWN の協力のもと実施した若者をターゲットとした SNS 発信について発表した。報告を通じて、1 年間の活動を振り返ることができ、今後の活動を考える良い機会になった。

●質疑応答

Q.これから参加者を増やしていきたいとのことだが、参加人数が増えると、住宅と道との距離が近い雑賀崎において観光客が歩き回ると騒音などの地域への悪影響が生じてしまうのではないかと感じた。これからロゲイニングをより発展させていく上で、どのように地域への配慮を行おうと考えているか。

A.地域の方とどのように関わっていくかについては、ロゲイニングに関わらずどのイベントを行う上でも考えなければいけない課題だと感じている。特にロゲイニングは、チェックポイントを探し歩き回ることになるため、地域の方のご協力やロゲイニングの開催目的を明確にする必要があると考えている。学生の中でも、どのように雑賀崎の地域の方とロゲイニングを通じて関わっていけば良いのか話し合いを行ってきた。話し合いを通じて、回覧板にて住民の方にイベントのことを事前に周知することや、お年寄りのかたでも参加しやすいルート作成などが挙げられた。しかし現在、ロゲイニングを続けていく目的が分からず、来年度も継続していくか決めかねている状態である。そのため、具体的にどのように地域の方と関わっていくか決められていない状況ではあるが、これからどのようなイベントをする際にも地域との関わり方は重要な観点になるため、ロゲイニングの継続の是非に関わらず考え続けていきたいと考えている。

和歌山県田辺市龍神村

テーマ:地域塾による龍神村の資源を活かした山村活性化

●報告について

発表には報告会用に作成したポスターの他、以前 LPP 交流会で使用したスライド資料を一部変更したものを使用した。龍神 LPP は他の L ゼミと掛け持ちで参加している学生も多いため、当日参加できる学生に限りがあったが 2 年生メンバーを中心に発表を行った。内容としては、昨年度まで 3 年間実施していた L ゼミでの活動と地域塾構想に至った流れ、地域塾の概要、今年度の活動、次年度以降の展望について発表した。

交流会の際には、先生などからより地域塾構想を具体化したものにブラッシュアップして関係機関との連携を進めていくべきだなどのアドバイスもいただいた。

●質疑応答

Q.地域塾構想について、具体的に誰が講師となり、どのような形態で実施するのか。

A.私たちが昨年まで行ってきたＬゼミでのフィールドワークの形式を土台にしながら、地域の若者の新鮮なアイデアを創出しやすいようなブレインストーミングの実施などを検討中である。

地域連携プログラム(LPP)の沿革

■2008～10 年度(平成 20～22 年度)

地域インターンシップ・プログラム(通称 LIP ※2012 年度に改称)は、2008 年観光学部の設置とともにスタート。観光学部より和歌山県下の自治体への協力要請を行い、各教員が担当する自治体との協議を重ね、早いプログラムでは 2008 年度中に、遅いものでも 2009 年度中にはプログラムの実施に至った。

・実施状況／参加学生数(延べ人数)：

6 件／42 名(2008)、8 件／46 名(2009)、3 件／18 名(2010)

■2011 年度(平成 23 年度)

・地域連携担当の配置

・地域インターンシップ実施要項の整備

◇地域(自治体)からプログラム内容について提案を受け付ける「地域提案型」と教員の地域との共同研究をベースとした「申請型」の 2 つのプログラムを設定。

◇主要な活動対象エリアを、和歌山県内に加えて大阪南部の自治体(岬町、阪南市、泉南市、田尻町、泉佐野市、熊取町、貝塚市、岸和田市)にまで拡大。

・地域提案募集：5 月に送付

・実施状況／参加学生数(延べ人数)：4 件／24 名

■2012 年度(平成 24 年度)

・名称変更：RIP から LIP へ改称

・実施要項の改訂

◇申請型については、主たる活動エリアを和歌山県内と大阪南部以外でも可とした。

・地域提案募集：5 月に送付

・実施状況／参加学生数(延べ人数)：11 件／80 名

■2013 年度(平成 25 年度)

・地域連携の所管が観光教育研究センター(現：観光実践教育サポートオフィス)となり、担当者を配置。

・LIP の制度改善を図るため、活動実績のある自治体の担当者にヒアリング調査を実施。

・LIP の認知度や参加意識を明らかにするため、学生対象のアンケート調査を実施。

・地域提案型プログラムの質向上のため、活動実績のある自治体や和歌山市周辺の自治体を廻り、LIP の評価の聞き取りや新制度についての周知活動を実施。

・地域提案募集：4 月に送付

・実施状況／参加学生数(延べ人数)：5 件／73 名

■2014 年度(平成 26 年度)

・LIP 周知活動の一環として、2014 年度活動の報告書を作成(以後継続して作成)。

・地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付

・実施状況／参加学生数(延べ人数)：10 件／139 名

■2015 年度(平成 27 年度)

- ・LIP 周知活動の一環として、2015 年度活動の報告書を作成。なお、報告書には、2008～2015 年度までの LIP に関するデータを所収(以後継続して所収)。
- ・地域提案募集:地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
- ・実施状況/参加学生数(延べ人数):15 件/191 名

■2016 年度(平成 28 年度)

- ・LIP 周知活動の一環として、2016 年度活動の報告書を作成。
- ・LIP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施(以後継続して実施)。
- ・地域提案募集:地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
- ・実施状況/参加学生数(延べ人数):21 件/227 名

■2017 年度(平成 29 年度)

- ・LIP 周知活動の一環として、2017 年度活動の報告書を作成。
- ・LIP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施。
- ・地域提案募集:地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
- ・実施状況/参加学生数(延べ人数):19 件/217 名

■2018 年度(平成 30 年度)

- ・LIP 周知活動の一環として、2018 年度活動の報告書を作成。
- ・LIP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施。
- ・地域提案募集:地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
- ・実施状況/参加学生数(延べ人数):13 件/190 名

■2019 年度(令和元年度)

- ・LIP 周知活動の一環として、2019 年度活動の報告書を作成。
- ・LIP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施。
- ・LIP の質的向上、学びの深化、広い活動発信を目的に「LIP 合同活動報告会」を実施。
- ・地域提案募集:地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
- ・実施状況/参加学生数(延べ人数):14 件/194 名

■2020 年度(令和2年度)

- ・LIP 周知活動の一環として、2020 年度活動の報告書を作成。
- ・LIP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施。
- ・地域提案募集:地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
- ・実施状況/参加学生数(延べ人数):16 件/209 名

■2021 年度(令和3年度)

- ・LIP 周知活動の一環として、2021 年度活動の報告書を作成。
- ・LIP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施。
- ・LIP の質的向上、学びの深化、広い活動発信を目的に「LIP 合同活動報告会(オンライン)」を実施。
- ・地域提案募集:地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 1 月に送付。活動内容の質的向上のため、公募タイプのうち 2021 年度新規提案募集分から、地域側から事前に担当教員の希望を受け付け、教員が承諾したものをプログラム化することとしたため。
- ・実施状況／参加学生数(延べ人数):21 件／231 名
- ・2022 年度(令和 4 年度)から、「地域連携プログラム(Local Partnership Program, LPP)」へと名称・枠組みを変更することとなり、制度設計の見直し・各所への通知などを実施。

■2022 年度(令和 4 年度)

- ・「地域連携プログラム(Local Partnership Program, LPP)」へと名称・枠組みを変更。
- ・LPP 周知活動の一環として、2022 年度活動の報告書を作成。
- ・LPP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施。
- ・LPP の質的向上、学びの深化、広い活動発信を目的に「LPP 合同活動報告会」を実施。
- ・地域提案募集:地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 1 月に送付。LIP から LPP への移行期間とするため、2022 年度は新規プログラム(L ゼミ地域公募タイプ)の募集は実施せず、2021 年度からの継続プログラムおよび L ゼミ教員申請タイプ、L 活を実施した。
- ・実施状況／参加学生数(延べ人数):19 件／210 名

■2023 年度(令和 5 年度)

- ・LPP 周知活動の一環として、2023 年度活動の報告書を作成。
- ・LPP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施。
- ・LPP での学びや活動の振り返り、共有を目的とした、LPP 参加学生の交流会を実施。
- ・LPP の質的向上、学びの深化、広い活動発信を目的に「LPP 合同活動報告会」を実施。
- ・地域提案募集:地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 1 月に送付。
- ・実施状況／参加学生数(延べ人数):18 件／189 名

■2024 年度(令和 6 年度)

- ・LPP 周知活動の一環として、2024 年度活動の報告書を作成。
- ・LPP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施。
- ・LPP での学びや活動の振り返り、共有を目的とした、LPP 参加学生の交流会を実施。
- ・LPP の質的向上、学びの深化、広い活動発信を目的に「LPP 合同活動報告会」を実施。
- ・LPP の質的向上、個々の学生の学びの深化を目的に「LPP 個人レポート課題」を課した。
- ・地域提案募集:地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 1 月に送付。
- ・実施状況／参加学生数(延べ人数):17 件／155 名

【これまでの LIP/LPP 活動地域と活動テーマ一覧】

市町村名	活動年度	活動テーマ
和歌山市	2009	四季の郷公園周辺調査等
	2010	四季の郷公園と周辺農地を利用した農業観光の振興、および中心市街地との連携による活性化調査
	2011	お城を中心としたまちなか回遊性の創出
	2014	和歌山市民の森づくり事業
	2015・16	和歌山公園動物園(通称:お城の動物園)の環境エンリッチメントを通じた観光活用
	2016	地域資源を活用した、見どころマップの作成とまちあるきの実施(山東地域)
		名勝「和歌の浦」の魅力発信
		和歌山市立伏虎中学校の閉校記念誌づくり
	2016・17	観光資源を活用した観光振興の体験と調査・研究(和歌山城におけるおもてなし忍者による観光振興を通じて)
	2017	和歌山公園動物園(通称:お城の動物園)の地域資源としての観光活用～和歌山公園動物園の今後とリニューアルの検討～
	2021-23	加太・磯の浦エリアにおける観光映像を活用した地域振興
	2022-23	雑賀崎の観光スポット(レモンの丘)整備と活用のための情報発信(L活)
	2024	雑賀崎の地域資源の情報発信と空き家の利活用(L活)

市町村名	活動年度	活動テーマ
岩出市	2015	観光地の活性化と情報発信
	2018	SNS を利用した地域資源再発見と訪れてみたいくなるコンテンツ作り
	2019	ねごろ歴史の丘巡りスタンプラリー帳作成
	2020-22	道の駅「ねごろ歴史の丘」利用者調査及び利用促進企画

市町村名	活動年度	活動テーマ
紀の川市	2009	青洲の里施設内で実習および農家民泊体験、地域住民との意見交換
	2010	「細野溪流キャンプ場」集客向上と地域活性化の検討
	2011	細野溪流キャンプ場を起点とした地域活性化
	2012-16	紀の川市地域活性化
	2018-22	紀の川スイーツの開発
	2023・24	紀の川市の新商品開発プロジェクト

市町村名	活動年度	活動テーマ
かつらぎ町	2008	花園ふるさとセンターの有効活用に関する調査研究
	2012	かつらぎ町日帰りプランの作成
		都市近郊中山間地域における交流型農業への展開可能性を探る

市町村名	活動年度	活動テーマ
橋本市	2009	青年の家やどりの運営体験およびリニューアルプランの検討

市町村名	活動年度	活動テーマ
海南市	2020-22	交流・関係人口増を目指したエリア体験型観光コンテンツ開発
	2023-24	大崎地区の歴史と現状を体験的に調べ、暮らしを継続的なものとするためのステップを議論する

市町村名	活動年度	活動テーマ
紀美野町	2014	地域活性化にむけた調査研究(現地ヒアリング)
	2015-17	地区×学生による継続可能な地域活性化にむけた寄り添い型支援体制の構築と観光・交流情報発信
		世代間交流を推進する地域拠点の企画・運営(認知症カフェでの実践を通じて)
	2018	地区×学生による知られざる歴史掘り起こしと観光・文化・交流情報発信
	2018-19	世代間交流を推進する地域拠点の企画・運営(コミュニティカフェ等での実践を通じて)
	2019-24	地区×学生による観光・文化・交流情報発信と棚田の再生
	2020-22	きみのげんきマップの作成

市町村名	活動年度	活動テーマ
有田市	2013	みかん産地の農家の今後を考える(有田地域みかん農家経営継続課題調査)
		有田地域における魅力的な居住環境を考える(有田地域の居住地選定要因に関する調査)
	2014	地元小学生が見つけた地域の資源に対する傾向・特性調査とその活用提案
	2016	魅力ある図書館づくり—新図書館開館にむけて—
		空き家活用による地域活性化プロジェクト
	2017	市民が集う市民会館づくり—新市民会館開館にむけて—
	2017-18	地域で働く人の魅力を子どもたちに伝える
	2019	箕島の魅力発信
	2020-22	箕島で暮らす多世代の住民による魅力再発見
	2020-24	青みかん(摘果みかん)の価値を上げる
	2023	ICTの活用による多世代で取り組むまちづくり
	2024	多世代で取り組むまちづくり

市町村名	活動年度	活動テーマ
有田川町	2008-09	観光スポット調査(鉄道フロムナード、あらぎ島・清水温泉周辺)、および各種施設における就業体験

有田川町	2010	観光スポット調査(観光ブドウ園ほか)、および各種施設における就業体験と町内宿泊施設におけるモニター宿泊
	2011	観光スポット調査、および各種施設(鶏卵牧場ほか)における就業体験と町内宿泊施設におけるモニター宿泊
	2012・13	学生との協働による棚田保全活動体制の構築に関する基礎調査
	2014	しみず体験・学習プログラムの開発
	2014-18	学生との協働による継続的な棚田保全活動体制の構築
	2019-21	学生との協働による継続的な棚田保全活動(棚田ふぁむ)
	2022-24	学生との協働による継続的な棚田保全・集落支援活動

市町村名	活動年度	活動テーマ
湯浅町	2009	町内主要施設の視察と集客イベントへの活用法の検討、および有力事業者への観光誘客に関わる聞き取り、イベントにおける JAZZ バンド演奏会の開催
	2023・24	湯浅の若者と共につくる本気の商品開発!

市町村名	活動年度	活動テーマ
広川町	2014-19	津木地区寄合会の運営、特産品開発、情報発信、イベントを共に考える
	2020・21	ツギー谷のお花畑の活用を通した津木地域の活性化を考える
	2022	ツギー谷のお花畑の活用を通した津木地域の活性化を考える(L 活)
	2024	和歌山県広川町の地場農産物を活用した新商品の開発

市町村名	活動年度	活動テーマ
由良町	2014	観光地の新たな魅力発見

市町村名	活動年度	活動テーマ
日高町	2016・17	地域資源の自慢を後世に引き継ぐと共に経済効果のある参加型イベントの企画立案を共に考える

市町村名	活動年度	活動テーマ
日高川町	2008	小学生の農村生活体験実習受入のための基礎調査
	2009	子ども農山漁村交流プロジェクト推進のための学生サポーターおよび課題発見
	2012	日高川町における祭事を中心とした伝統文化と地域活性化についての調査
	2017-19	体験教育旅行&夏学習～都会と大自然の出会い(かつらぎ町も含む)

市町村名	活動年度	活動テーマ
美浜町	2017	日の岬・アメリカ村の歴史的資源等を活用した観光とふるさと教育

美浜町	2019	カナダミュージアムにおけるミュージアム機能の強化
	2020-22	アメリカ村の観光コンテンツの発掘及び情報発信
	2023・24	美浜町の資源を生かした観光誘客

市町村名	活動年度	活動テーマ
みなべ町	2012	みなべ町の新たな魅力発掘・発信事業(みなべ観光協会事業)

市町村名	活動年度	活動テーマ
田辺市	2008	秋津野ガルデン附設レストラン「みかん畑」利用客の観光行動アンケート調査、及び田辺市広域市町村圏の関係者との意見交換
	2009	農山村における UJI ターン者と地元住民との連携
	2012	和歌山県版・農山村ワーキングホリデーのシステム構築
	2017	ほっとスポット温川プロジェクト
	2024	地域塾による龍神村の資源を活かした山村活性化(L 活)

市町村名	活動年度	活動テーマ
白浜町	2023・24	白良浜他海水浴場における集客力アップ及び顧客ニーズに合ったサービスの企画開発

市町村名	活動年度	活動テーマ
上富田町	2008	観光資源調査と地域の農・商・工関係者との意見交換会
	2017	地域資源を活用した“おどろきと感動”の地域づくり
	2018・19	笑顔が広がる美しい里づくり

市町村名	活動年度	活動テーマ
すさみ町	2008	各種体験観光施設の調査と関係者への聞き取り

市町村名	活動年度	活動テーマ
串本町	2017	マグロ料理で観光PR

市町村名	活動年度	活動テーマ
那智勝浦町	2016-18	地域の文化や風習、そこで暮らす人々と直にふれあいながら、これからの地域・自分・社会のあり方・つながり方を考える
	2019	地域の文化や風習の体験、獣害対策、農作業、冊子作りを通じて地域の方々と触れ合い、地域・自分・社会のあり方・つながり方を考える
	2020-22	地域の文化や風習の体験を通じて、地域住民と触れ合い、地域・自分・社会のより良いあり方・つながり方を考える。(興味関心に応じて)地域をフィールドにそれぞれの知見を深め、価値を創出していく。
	2023・24	中山間地域における地域ハブ(HUB)の役割と可能性を考える

市町村名	活動年度	活動テーマ
新宮市	2020・21	新宮市高田区における観光モデルコースの造成
	2024	新宮市を訪れる観光客のニーズ調査・分析及びコンテンツ発掘・発信

市町村名	活動年度	活動テーマ
太地町	2009	移民関連勉強会、および地域住民、町職員との意見交換
	2012	地域資源として移民輩出の歴史を活かした観光の活性化を考える

市町村名	活動年度	活動テーマ
岬町	2012	「道の駅」建設に伴う検討委員会
	2015	マップを手にウォーキングをしたくなる気持ちを沸き立たせる「まち歩きマップ」の作成
	2016	岬フィールドミュージアム構想
	2017	着地型観光による地域活性化の取り組み
阪南市	2016	産業観光ワークショップ HANNAN OSAKA cotton project
	2018・19	地方創生にかかる地場産物商品に関する調査・研究、デザイン考案等
	2020-22	古代米を活用した商品開発、PR に関して。「古代米をおいしく食べる」
	2023・24	阪南市の産業振興と魅力発信
田尻町	2015	君が見つけたじりの魅力ー出会いと交流で創る健幸のまちー
熊取町	2015	第 4 回熊取ふれあい農業祭
	2016	第 5 回熊取ふれあい農業祭
	2017	第 6 回熊取ふれあい農業祭
岸和田市	2021・22	港湾エリアにおける持続可能なまちづくり
	2021-23	景観資源活用による景観意識の向上と地域の賑わい・活性化への貢献
	2021・22	岸和田市とアドベンチャーワールドが創る未来の smile とは
	2023・24	古民家活用を通して地域課題の解決策を考え、実践する。

市町村名	活動年度	活動テーマ
岩手県奥州市 および和歌山 県	2012	故郷(ふるさと)への誇りを取り戻すためのグリーン・ツーリズム
	2013	農村ワーキングホリデーを通じた農村再生の可能性を探る
	2014-21	農村ワーキングホリデーを活用した都市農村交流の「鏡効果」と農村再生手法としての可能性の検証
北海道 幕別町	2014・15	地域の観光に係る調査研究(観光と地域のあり方についての調査研究及び観光資源の掘り起こし等)
富山県 南砺市	2015	五箇山における持続可能な観光の実現に向けた実証調査
長野県 飯田市	2015・16	道の駅遠山郷を核とした地域活性化

宮崎県	2016	みやざき観光コンベンション協会からの依頼に基づいた同県「波旅宮崎」キャンペーンのより効果的な展開に対する提案、提言作成
山口県岩国市 および愛媛県 新居浜市	2020	瀬戸内カレッジ 2020
岡山県津山市 および香川県 坂出市	2021	瀬戸内カレッジ 2021
広島県広島市 および香川県 さぬき市	2022	瀬戸内カレッジ 2022
福井県福井市 および富山県 南砺市	2023	北陸カレッジ 2023

地域・団体名	活動年度	活動テーマ
JAいずみの管内	2011・12	JA 直営型農産物直売所を拠点とした都市農村交流の推進
わかやま産業振 興財団	2015・16	特産果樹がもたらす共創価値の創造(新たな健康・産業づくり)
公益社団法人日 本マスターズ陸 上競技連合	2017	公益社団法人日本マスターズ陸上競技連合が主催する国際・第38回全日本マスターズ陸上競技選手権大会においてスポーツを通じて、地域の人びとや海外競技者との国際交流
和歌山県	2018	「ねんりんピック紀の国わかやま 2019」、大会参加者に対する観光ツアーの開発(和歌山県全域)
	2019	「ねんりんピック紀の国わかやま 2019」における、観光ツアー同行を通じた観光業務の実践(和歌山県全域)
	2020・21	「紀の国わかやま文化祭2021」学生による文化の魅力発信(和歌山県全域)
	2021-23	「林業×地域」の再発見による地域将来ビジョン策定とシナリオプランニング(田辺市龍神村)
	2023・24	世界遺産登録20周年プレイベント 世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」を学び、熊野を盛り上げよう。

2024 地域連携プログラム活動報告書

令和 7 年 3 月 31 日発行

発行 和歌山大学観光学部観光実践教育サポートオフィス

〒640-8510 和歌山県和歌山市栄谷 930

印刷 井手印刷株式会社

